

形態、体部外面の肩部に横位のハケを施しその他は縦位のハケを施す調整等の特徴は、布留式壺の中でも最古の様相を示すもので壺F₁に分類される。54は東四国系壺の小破片である。復元口径14.0cmを測る。頸部は外傾して短く伸びた後、口縁部が屈曲するもので、端面は外傾して小さな面を作っている。外面の器面調整は体部外面上位にヨコハケをした後、頸部以下に左上がりのハケを施している。色調は赤褐色。胎土中に雲母を多量に含んでおり、讃岐地方の土器型式中のいわゆる「下川津B類」系統の土器にあたるものと考えられる。55は球形の体部に二段に屈曲する口縁部が付く壺。1/2以上が残存しており、口径11.7cm、器高18.6cm、体部最大径17.8cmを測る。体部の器面調整は、外面では上位に横位の一条のハケとそれ以下の中位にかけて左上がりのハケ、内面は体底部が指圧痕、中位から上位にかけてヘラケズリを行う。色調は淡褐灰色。胎土中にスコープで確認できる角閃石を含有している。56は大形の山陰系壺である。復元口径26.2cmを測る。器面調整は口縁部外外面ヨコナデ。体部外面は全体に細密な左上がりのハケ調整を行うが、上位においては一部ヨコナデにより消されている。体部内面は上位が指ナデ、中位以下はヘラケズリを行う。色調は淡灰褐色。撒入品である。

57～60は有稜高杯である。57は杯部口縁部が斜上方に直線的に伸びる精製の高杯で、高杯A₁にあたる。復元口径20.0cmを測る。60は脚部である。共に色調は赤褐色。58・59は小形の精製高杯である。58が杯部、59が図上で完形に復元できる。器面調整は共に丁寧で、杯部外外面および脚部外面に横位の密なヘラミガキが行われている他、杯部内面には放射状にヘラミガキが行われている。色調は赤褐色。

61～68は円錐状の脚部に皿状の受部が付く精製の小形器台である。全て中実のもので器台B₁にあたる。61～65の受部はやや深めの皿状で、壠部は上方につまみ上げられ内傾、外傾、垂直方向に小さな面を作る。66～68は脚部でスカシ孔は66・68が3孔、67が4孔である。器面調整は受部外外面および脚部外面は横位の密なヘラミガキ、受部内面には放射状ヘラミガキを施す。色調は灰白色～赤褐色である。69は杯部を欠くが残存部分からみて中空で「ハ」の字に開く脚部が付く大形器台と推定される。精製品で、色調は明橙色である。受部に稜を持つ形態で、河内地方においては類例の少ないものである。出土地点は2・7・10・13・21・24・26・47・48・61・62が2区の他は1区から出土している。土器の器種組成においては時期差を認めるものが無く安定しており、布留I期の良好な資料に位置付けられる。

S E - 1

11A地区の南部から12A地区の北部で検出した。東部が楠根川により削平を受けている。円形の掘方の中央部に桶を設置し井戸側とする農耕用の井戸と推定されるが、上部が削平されており上部構造は不明である。検出部分で東西幅1.1m、南北幅1.6m、井戸側径0.7mを測る。井戸側内の深さは0.9mまでは確認したが以下は湧水のため確認できなかった。埋土は5B5/1青灰色粘土質シルトである。遺物は出土していない。



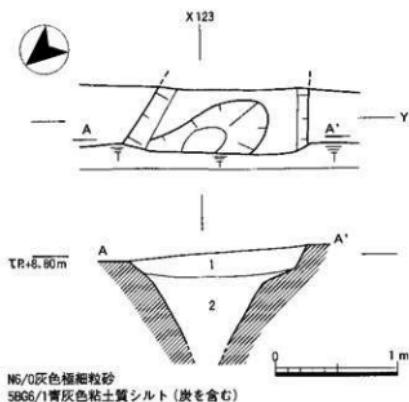
写真1 S E - 1 検出状況（西から）

・ 2 区

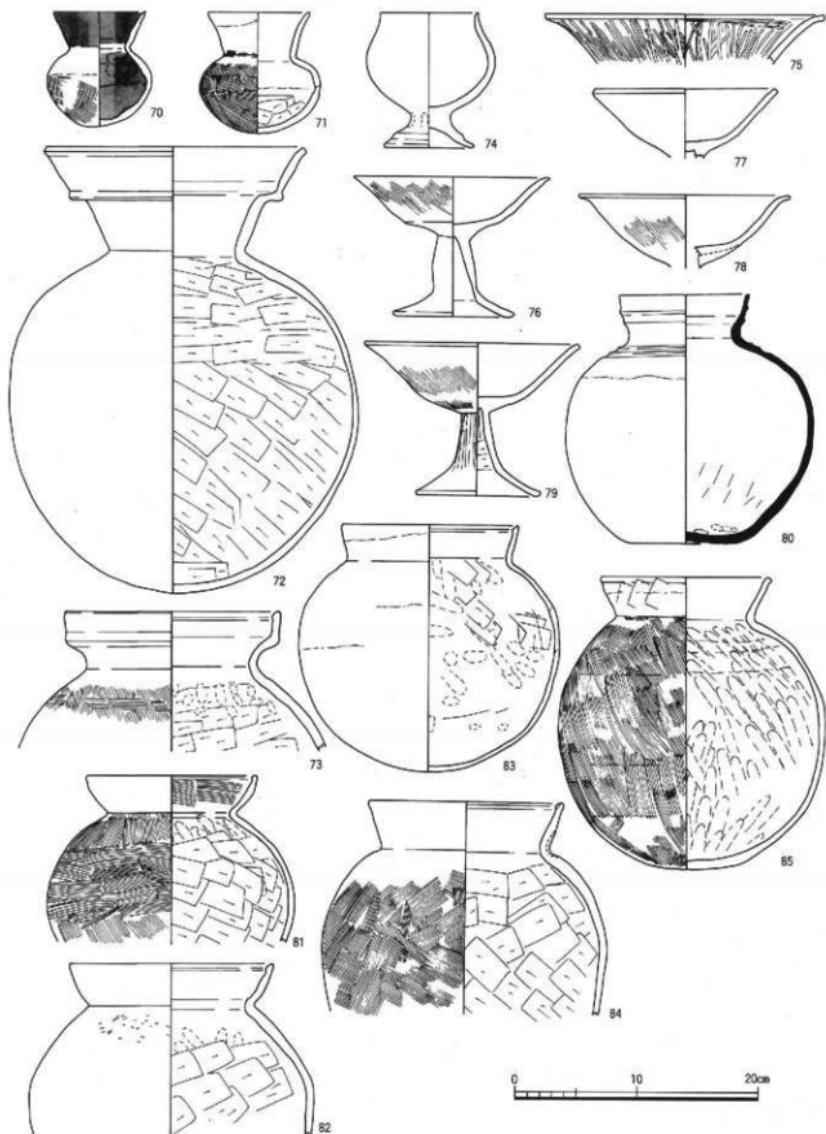
楠根川右岸の法面部分に設定した調査区で、北端は平成3年に当調査研究会が実施した中田遺跡第6次調査(N T91-6)地に接している。規模は東西0.1~0.9m、南北53mを測る。現地表下1.4m前後(T.P.+9.00m前後)に存在する第5層上面で古墳時代前期前半~後半(布留式古相~新相)に比定される土坑2基(S K-1・S K-2)、溝2条(S D-1・S D-2)、小穴4個(S P-1~S P-4)を検出した。なお、S D-1は1区で検出したS D-1の東に続くものである。

S K-1

2区南部の13A地区で検出した。西部が楠根川で削平を受けており全容は不明である。検出部分では二段の掘方を有する。上段の掘方は東西方向に伸びる溝状を呈するもので、東西幅0.4m、南北幅1.5mを測る。下段の掘方は上段から約0.15m下部から掘削されており、上面楕円形を呈するものと推定されるが、主要な部分は楠根川の河床に位置しており不明である。埋土は上層のN6/0灰色樹脂粒砂と下層の5BG6/1青灰色粘土質シルト(炭を含む)である。遺物は下層から古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される土器類がコンテナ1箱程度出土している。なかでも、土師器類とともに陶質の短頸壺が出土しており、この時期の陶質土器を考える上で貴重な資料を提供している。16点(70~85)を図化した。70・71は体部最大径が口径を凌駕する球形の体部に、斜上方に直線的に伸びる口頸部が付く小形丸底壺である。小形壺B₁にあたる。70が1/2、71がほぼ完形である。法量は70が口径7.6cm、器高9.4cm、体部最大径8.6cm、71が口径8.3cm、器高9.9cm、体部最大径10.0cmを測る。共に口頸部の外面にヨコナデ、体部外面に乱方向のハケ調整が行われている。70は内底面から口頸部外面にかけて漆が付着しており、漆の貯蔵容器として使用されていたものである。色調は70が灰白色、71が淡褐色である。71は生駒西籠産。72は大形の二重口縁壺である。口径21.0cm、器高36.2cm、体部最大径28.7cmを測る。器面調整は口頸部内外面がヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はヘラケズリを多用する。色調は外面は淡橙灰色~灰白色、内面は黒灰色である。胎土に1~3mmの長石・石英を含む。73は頸部が強く外反した後、上方に直線的に伸びる口縁部を持つ壺で、口縁端部は内傾肥厚する。複合口縁壺E₂に分類される。復元口径17.4cmを測る。色調は淡灰褐色。胎土中に1mm以下の長石・石英が散見される他、スコープで角閃石の含有が認められる。生駒西籠産。74は「ハ」の字状に開く脚台部にブランデーグラス状の体部が付く脚台付短頸壺である。小形品で口径7.9cm、器高11.1cm、脚部径7.2cm、脚部高2.7cmを測る。形態的には土



第9図 SK-1 平断面図



第10図 SK-1出土遺物実測図

師器中で同形態の系譜を引くものは河内地域では無く、おそらく野中古墳（藤井寺市）出土の陶質土器の小型把手付壺などにみられる形態を模倣したものと考えられよう。色調は灰白色。胎土中に1mm以下の長石・石英を多く含む。75~79は有稜高杯である。75は大形高杯の杯部片である。復元口径22.8cmを測る。高杯A₆にあたる。杯部の器面調整は外面ではタテハケの後、放射状にヘラミガキ、内面はヨコナデ後、放射状にヘラミガキを施す。色調は淡赤褐色。76の杯部は退化気味の稜部を持つもので、口縁端部は尖り気味で終わる。高杯A₆にあたる。色調は赤褐色。全体に器面の風化が顕著で、3mm以下の長石・石英を多く含む。77~79は杯部に明瞭な稜を持たないもので、高杯A₇にあたる。口縁端部が内傾して小さな面を作る77・79と口縁上部で強く外反する78がある。色調は77・78が淡橙色、79が灰白色である。80は陶質土器の短頸壺である。一部欠損するがほぼ全容を知ることが可能である。口径10.6cm、器高20.5cm、体部最大径20.3cmを測る。体部中位に最大径を持つ球形の体部から頸部が外反気味に伸びた後、ほぼ直上に短く伸びる口縁部が付くもので、口縁端部は丸味を持って終わる。底部は平底で中央部が僅かに窪む。口頭部内外面は回転ナデ。体部は外面上位が回転ナデ、以下ナデ。体部内面はナデ調整により平滑にされているが、体部下位の一部に工具痕が残存している。底部内面は指頭圧成形後ナデ溝が行われている。焼成は良好で堅敏であるが、色調は黒灰色～灰白色で部分的に濃淡があり、全体の雰囲気は瓦質土器に近い。胎土中に3~7mmの大長石・石英が散見される。なお、口頭部の中位に1条と体部上位に2条巡らしている回転ナデによる幅広の凹線については、器面調整の一環として考えるよりは寧ろ装飾的な要素が強い。なお陶質土器としたが、韓半島出土品との比較では、形態的に類似するものが存在するものの、凹線の施文形状を含めて同タイプのものが出土していないとの指摘があり、須恵器である可能性もある。81~84は布留式壺である。81・82の口縁部が内湾気味に伸びるに比して83・84は口縁部が直線的に伸びるもので布留式壺の最終形態を呈している。体部外面の器面調整は81については肩部に横位、その他は縦位にハケを施す比較的古い調整方法を残す以外は、乱方向のハケを施す84やナデによる調整を行う82・83がある。体部内面においては、ケズリを行う81・82・84とナデを行う83がある。色調は82・84が赤褐色、81・83が褐灰色である。81~83は胎土中にスコープで確認される角閃石を含んでいる。生駒西麓産である。85は布留式壺にみられた口縁端部の肥厚が一掃されたもので、古墳時代中期以降の壺の主流を成す壺Gにあたる。ほぼ完形に復元が可能で口径14.1cm、器高23.9cm、体部最大径22.0cmを測る。色調は淡褐色。生駒西麓産である。布留式新相の布留IV期にあたる。

SK-2

2区南部の14A地区で検出した。西部が楠根川により削平を受けており全容は不明である。検出部分では北東-南西に梢円形状を呈するもので、東西幅0.7m、南北幅3.5m、深さ0.25前後を測る。埋土は5Y8/1灰白色粘土の單一層である。遺物は土師器の小破片が少量出土したが、時期は明確でない。

SD-2

2区南部の13A地区で検出した。東-西に伸びるもので、検出部分で東西長0.45m、南北幅2m、深さ0.15mを測る。埋土は上部が5YR4/4にぶい赤褐色細粒砂で下層が5Y6/1灰色細粒砂である。遺物は



第11図 SD-2出土遺物実測図

古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される古式土師器の小破片が少量出土している。小形壺1点（86）を図化した。図上で完形に復元が可能で、口径11.9cm、器高10.4cm、体部最大径12.4cmを測る。形態的には庄内式壺の系譜を引くものであるが、体部外面にハケを多用する点から布留式影響の庄内式壺である壺Dに分類される。色調は淡赤褐色。非生駒西麓産である。布留I期に比定される。

S P - 1

2区南部の12A地区で検出した。円形を呈するもので、東西径0.25m、南北径0.3m、深さ0.3mを測る。埋土は10YR5/1褐色極細粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

S P - 2

S P - 1の南約2.7m地点で検出した。西部は楠根川より削平を受けており全容は不明である。検出部分で東西幅0.25m、南北幅0.25m、深さ0.34mを測る。埋土は10YR5/1褐色極細粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

S P - 3

2区南部の14A地区で検出した。西部が楠根川より削平を受けており全容は不明である。検出部分で東西幅0.55m、南北幅0.8m、深さ0.12mを測る。埋土は10YR5/1褐色極細粒砂の単一層である。遺物は土師器の小破片が出土したが時期は明確でない。

S P - 4

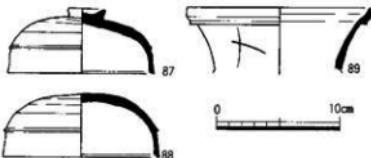
S P - 3の南に隣接している。円形を呈するもので、東西径0.15m、南北径0.25m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR5/1褐色極細粒砂の単一層である。遺物は土師器の小破片が極少景出土したが時期は明確でない。

・3区

楠根川右岸の法面部分に設定した調査区で2区の南側に続く調査区である。規模は東西0.2~0.8m、南北62.5mを測る。現地表下1.4m前後（T.P.+9.20m前後）に存在する第5層上面で古墳時代中期の遺構を検出した。検出した遺構は溝2条（S D - 3・S D - 4）、小穴2個（S P - 5・S P - 6）で、全て17A地区に集中している。

S D - 3

東~西に伸びるもので、検出部分で東西長0.5m、南北幅0.45m、深さ0.3m前後を測る。埋土は上層が7.5Y6/1灰色極細粒砂で下層が7.7/0灰白色粘土質シルトである。遺物は古墳時代中期後半に比定される須恵器の壺・杯蓋・有蓋高杯等が少量出土している。須恵器3点（87~89）を図化した。87は幅広で中央部が窪むつまみが付く有蓋高杯蓋である。口径12.0cm、器高5.3cm、つまみ径3.1cmを測る。天井部から口縁部にかけて灰かぶりが認められる。色調は淡灰青色である。88は丸味のある高い天井部を持つ杯蓋である。完形品で口径12.7cm、径12.6cm、器高5.2cmを測る。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する。89は壺の口縁部である。口縁部の1/4が残存している。復元口径14.8cmを測る。頸部外面に「×」のヘラ記号が認められる。色調は青灰色



第12図 S D - 3 出土遺物実測図

である。3点共に、田辺編年のT K23型式（5世紀後半）に比定される。

S D - 4

北西—南東に伸びるもので、検出長0.8m、幅0.6m、深さ0.2m前後を測る。埋土は上層が2.5GY7/1明オーリーブ灰色細粒砂で下層がN5/0灰色極細粒砂である。遺物は古墳時代中期に比定される土器および須恵器の小破片が少量出土している。

S P - 5

S D - 3 の南に近接している。上部が削平を受けている他、東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で半円形を呈するもので東西幅0.2m、南北幅0.65m、深さ0.1mを測る。埋土は5B6/1青灰色シルトである。遺物は出土していない。

S P - 6

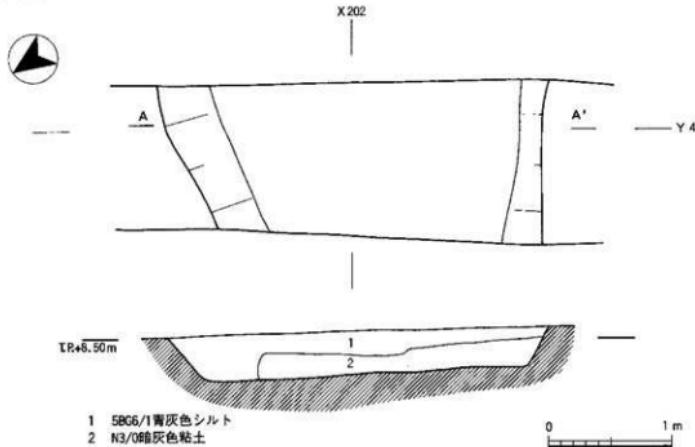
S P - 5 の南に隣接している。S P - 5 と同様、上部が削平を受けている他、東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で不定形を呈するもので、東西幅0.7m、南北幅0.8m、深さ0.25mを測る。埋土は5B6/1青灰色シルトである。遺物は出土していない。

・4区

楠根川左岸から河床にかけて設定した調査区で1区の南側に続く調査区である。規模は東西1.5m、南北65mを測る。調査区が楠根川の河床にあたるため第5層の中位まで削平を受けていた。調査の結果、第5層下部(T.P.+8.50m)で古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される溝1条(S D - 5)を検出した。

S D - 5

4区南端の21A地区で検出した。東—西に伸びるもので、検出部分で検出長1.5m、南北幅3m、深さ0.35m前後を測る。但し、上面が削平を受けており本来の構築面は不明である。埋土は上層が5B6/1青灰色シルト、下層がN3/0暗灰色粘土である。遺物は古墳時代初頭前半(庄内式古相)



第13図 SD - 5 平断面図

比定される古式土師器の壺・高杯等の小破片が少量出土している。2点(90・91)を図化した。90は二重口縁壺の小破片で、口縁部の上部は擬L字縁部から先を欠く。残存部分で口縁部外面下半に竹管押圧円形浮文と波状文を施す。擬口縁部上面にはヘラ先による粗い波状文が残されているが、これについては口縁上部との接合を強固にする目的で行われたものと推定される。色調は橙色である。91は高杯の脚部である。規模からみて小形高杯に分類される。器面ならびに破面に煤が付着しており、廃棄後に火熱を被ったものと推定される。色調は淡灰褐色。古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される。

・5区

道路を挟んで2区の北側に設定した調査区で、楠根川右岸の法面部分にあたる。南端は昭和60年度に大阪府教育委員会が実施したNo40トレンチに接している。規模は東西0.7~1.1m、南北42.5mを測る。現地表下1.3m前後(T.P.+9.00m前後)に存在する第5層上面で、古墳時代中期~後期に比定される遺構を検出した。検出した遺構は土坑1基(SK-3)、小穴4個(SP-7~SP-10)で3A地区に集中していた。

SK-3

南北に長い不定形を呈するもので、東部は調査区外に至るため不明である。東西幅0.3~1.0m、南北幅4.0m、深さ0.25m前後を測る。埋土は7.5YR6/2灰褐色砂質シルトの單一層である。遺物は古墳時代中期~後期に比定される上器類が少量出土している。

2点(92・93)を図化した。92は土師器高杯の小破片である。復元口径17.4cmを測る。色調は淡褐灰色。93は須恵器杯身の小破片である。復元口径12.2cmを測る。田辺編年のTK23型式(5世紀後半)のものか。

SP-7

SK-3の北に近接している。楕円形を呈するもので、長径0.4m、短径0.3m、深さ0.18mを測る。埋土は7.5YR6/2灰褐色砂質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

SP-8

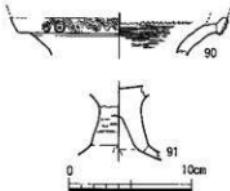
SK-3の南に近接している。円形を呈するもので、径0.15m、深さ0.1m前後を測る。埋土は7.5YR6/2灰褐色砂質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

SP-9

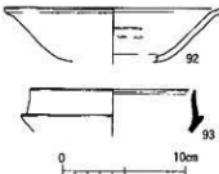
SP-8の南東に隣接している。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西径0.4m、南北径1.0m、深さ0.1m前後を測る。埋土は7.5YR6/2灰褐色砂質シルトの單一層である。遺物は古墳時代後期に比定される土師器土釜の小破片が出土している。

SP-10

SP-9の南西部に近接している。西部が楠根川により削平を受けている。検出部分で半円形



第14図 SD-5 出土遺物実測図



第15図 SK-3 出土遺物実測図

を呈するもので東西幅0.3m、南北幅0.55m、深さ0.2mを測る。埋土は7.5YR6/2灰褐色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

・ 6区

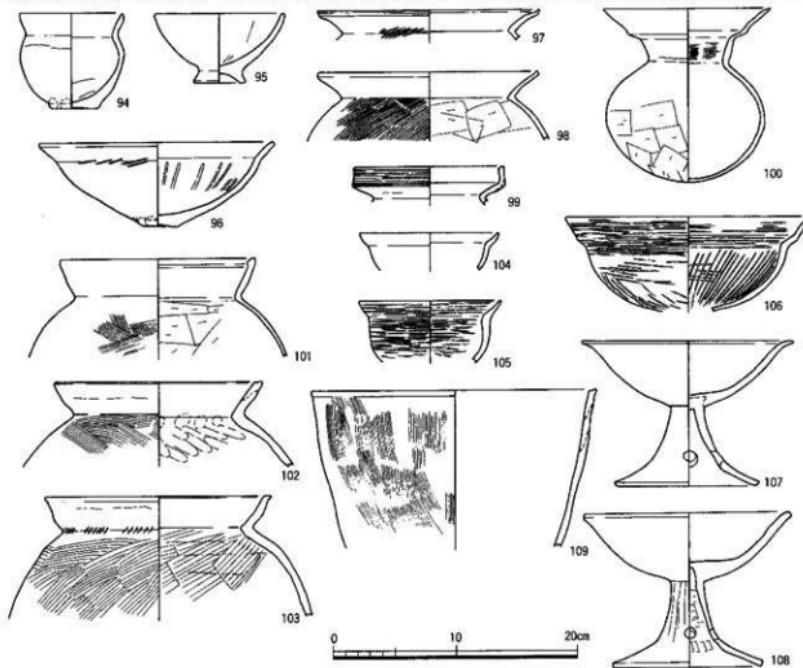
道路を挟んで1区の北部に設定した調査区で、楠根川の左岸から河床部分にあたる。南端は5区と同様、昭和60年に大阪府教育委員会が実施したNo40トレーナーに接している。規模は東西2m、南北42mを測る。第1区および第4区と同様、楠根川により第5層中位まで削平を受けており、河川内の堆積土を取り除いた面（第5層下位）を調査対象としたが遺構は検出されなかった。

2) 遺構に伴わない出土遺物

・ 第4層出土遺物

1～4区の第4層から、弥生時代後期末～古墳時代前期後半（布留式新相）に至る遺物が出土している。15点（94～108）を図化した。94～96は弥生土器、97～108は土師器である。

94はミニチュアの甕である。完形品で口径8.2cm、器高8.5cm、底部径3.6cmを測る。底部は平面で裏面はドーナツ底である。色調は赤褐色。胎土中に1mm以下の長石・石英を多く含む。95は底部が上げ底の形態を持つ小形鉢である。ほぼ完形で口径11.3cm、器高5.7cm、底径3.9cmを測る。



第16図 第4層出土遺物実測図

色調は褐灰色。生駒西麓産。96は摺鉢状の体部に小さく外反する口縁部が付く中形鉢である。ほぼ完形で口径18.9cm、器高6.9cm、底径2.6cmを測る。底部は突出しない平底で、裏面はくぼみ底である。色調は赤褐色。94～96は弥生時代後期末に比定される。94～96は3区16A地区出土。97・98は庄内式甕である。共に口縁部の1/8程度が残存している。復元口径は97が18.0cm、98が17.7cmである。共に体部外面には右上がりの細筋タタキを施すもので、97についてはタタキが口縁部におよぶ。生駒西麓産。古墳時代初頭後半（庄内式新相）に比定される。97が4区20A地区出土。98が3区15A地区出土。99は吉備系の甕である。口縁部の小破片で復元口径12.0cmを測る。口縁部に多条の擬凹線を廻らす。搬入品である。1区13A地区出土。100は精製の小形二重口縁甕である。ほぼ完形で口径13.3cm、器高14.2cm、体部最大径12.7cmを測る。球形の体部から頸部が斜上方に伸びた後、二段に屈曲する口縁部を形成するものである。全体に風化が進行しており、器面調整が不明瞭である。色調は赤褐色である。古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される。2区11A地区出土。101は布留式甕の小破片である。復元口径15.8cmを測る。口縁端部の内傾肥厚が幅広のもので、布留式甕の最終段階の形態を示している。色調は淡灰褐色。2区13A地区出土。102・103は共に布留式甕の消滅後に主流を成す甕Gに分類される。布留式甕に比して器壁が厚いことが特徴的である。L1縁部の上部で外反しており、端部は内傾して幅広の面を形成している。色調は赤褐色である。共に3区15A地区出土。101～103は古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される。104・105は共に精製の小形鉢である。共に小破片で復元口径は104が11.2cm、105が11.5cmを測る。古墳時代初頭後半（庄内式新相）に比定される。共に1区13A地区出土。106は精製の小形鉢で鉢H₂にあたる。色調は灰褐色。布留式古相に比定される。2区14A地区出土。107・108の高杯は杯部が椀形を呈するもので、高杯A₁にあたる。法量は107が口径17.0cm、器高11.9cm、裾径11.1cm、108が口径16.5cm、器高12.7cm、裾径11.7cmを測る。共に古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される。共に2区13A地区出土。109は瓶である。口縁部の約1/3が残存している。復元口径23.0cmを測る。色調は淡灰褐色。胎土中に4mm以下の長石・石英を多量に含む。5世紀前半のものか。3区15A地区出土。

・第3層出土遺物

2区および5区の第3層から、古墳時代中期後半～後期中葉に比定される土師器・須恵器が出土している。6点（110～115）を図化した。

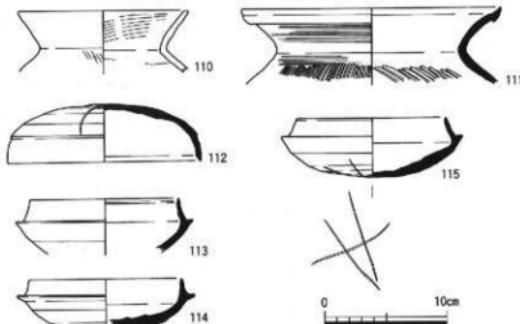
110は土師器甕である。口縁部の約1/4が残存している。復元口径13.9cmを測る。口縁部内面に横位のミガキを施す。色調は淡灰褐色。5区3A地区出土。111は須恵器甕である。口縁部の約1/4が残存している。復元口径21.2cm。口縁端部は上下に肥厚して外傾する外側面を形成する。口縁部外面にカキメ、体部外面にタタキ、内面に単位幅の広いタタキを施す。色調は灰青色。胎土は粗く0.5～4.0mmの大の長石粒を多量に含む。5世紀末に比定される。2区14地区出土。112は須恵器杯蓋である。1/2が残存している。口径15.8cm、器高4.7cm、径15.2cmを測る。天井部の中央から後部にかけて、1本の直線文で表現されるヘラ記号がある。色調は灰色。TK10型式（6世紀中葉）に比定される。5区2A地区出土。113～115は須恵器杯身である。115がほぼ完形。113・114は口縁部の約1/4が残存している。113は復元口径12.2cmを測る。立ち上がりは短く内傾して伸びるもので、口縁端部内面に段が廻る。MT15型式（6世紀前半）に比定される。色調は灰青色。114は平坦な底部を有するもので、立ち上がりは短く内傾して伸びる。色調は灰白色～黒灰色。115

は口径12.2cm、器高4.8cm、受部径14.8cmを測る。浅く丸味を持つ体底部から水平方向に伸びる受部が付く。立ち上がりは内傾して直線的に伸びるもので、端部は丸く終わる。色調は青灰色。外底部に「 \times 」のヘラ記号が残る。114・115共にT K10型式（6世紀中葉）に比定される。113・115が5区2

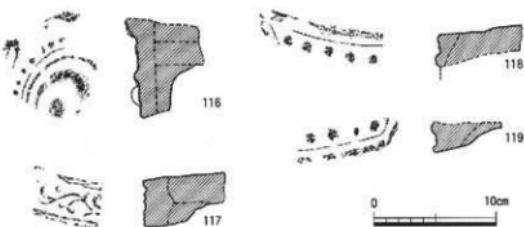
A地区出土。114が5区3A地区出土。

・第10・11層出土遺物

2区北部の9・10A地区の第10・11層から出土したものである。この部分については、断面観察の結果、遺構検出面である第5層を切り込み、東西方向に伸びる溝（室町時代中期～後期）の下部を構成する地層にある。屋瓦類が比較的まとまって出土しているが、小破化したものが大半を占める。屋瓦4点（116～119）を図化した。116は左巻きの巴文軒丸瓦である。瓦当面の約1/4を残すが、外区外縁については欠損が著しく旧状を残す部分はない。巴は高く、幅広の頭部から急激に幅を狭めて尾部に至る。外区内縁は圓線を隔てて小粒で隆起の小さな珠文を密に配する。色調は淡灰色。胎土中に0.5～5mm大の長石・花崗岩が散見される。鎌倉時代後半のものか。117は唐草文軒平瓦である。瓦当面の中央部から左寄りの部分にあたる。幅3.8cmを測る。顎は段顎で、接合部は補足粘土を用い、接合を強固にしている。平瓦凹面の先端部分がナデ、それ以外は全面に布目を残す。焼成は良好。色調は灰色を呈する。胎土は良好で砂粒の含有は少ない。118・119は連珠文軒平瓦である。118は瓦当面の左端部分で、瓦當下部を欠く。119は瓦当面の右端部分で、上部を欠く。共に圓線で区画された内区に幅1cm前後で隆起の高い珠文を配する。外区外縁は幅6mm前後を測る。118の平瓦凹面に布目が残る。共に色調は灰白色～黒灰色。胎土中に1～2mm大の長石・石英・チャートを多量に含む。118・119は鎌倉時代に比定される。なお屋瓦出土地点一



第17図 第3層出土遺物実測図



第18図 第10・11層出土遺物実測図

帶の小字名は「宮後」であり、西に隣接して「宮下」「宮前」がある。特に「宮下」においては、式内社である由義神社が鎮座している。由義神社一帯は、奈良時代後半の称徳天皇の3回に及ぶ河内行幸時の行宮位置と推定されている他、神護景雲三年（769）に設けられた「西京」の中核部分を成す地点であると考えられている。由義神社は「西京」の設けられた時に勧請されたものと伝えられており、これらの屋瓦については由義神社に付随した神宮寺に関連した蓋然性が高く、少なくとも鎌倉時代後半迄は寺院建物が存在したことを物語っている。

註記

- 註1 1973『中田遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
註2 松田順一郎 2000「第Ⅷ章考察 第1節八尾市小阪合遺跡における弥生時代～古代の河川堆積作用と地形発達」『小阪合遺跡（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第51集』
註3 福井英人 1986『中田遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
註4 成海佳子 1995「Ⅱ 中田遺跡第6次調査（NT90-6）」『中田遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告49』（財）八尾市文化財調査研究会
註5 岸田真一 1994「35. 中田遺跡第19次調査（NT93-19）」『平成5年（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
註6 北野耕平 1976『河内野中古墳の研究』臨川書店
註7 慶星大学 申澈敬氏より御教示賜った。原田昌則 1993「中田遺跡出土の陶質土器について」『韓式系上器研究IV』韓式系土器研究会
註8 清 康 2002「Ⅳ中田遺跡（第48次調査）」（財）八尾市文化財調査研究会報告73】

参考文献

・古式土師器の型式分類

原田昌則 1993「第5章まとめ 3」中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」「Ⅱ久宝寺遺跡（第1次調査）」（財）八尾市文化財調査研究会報告37（財）八尾市文化財調査研究会 但し一部表記を変えた部分がある。

・須恵器

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ

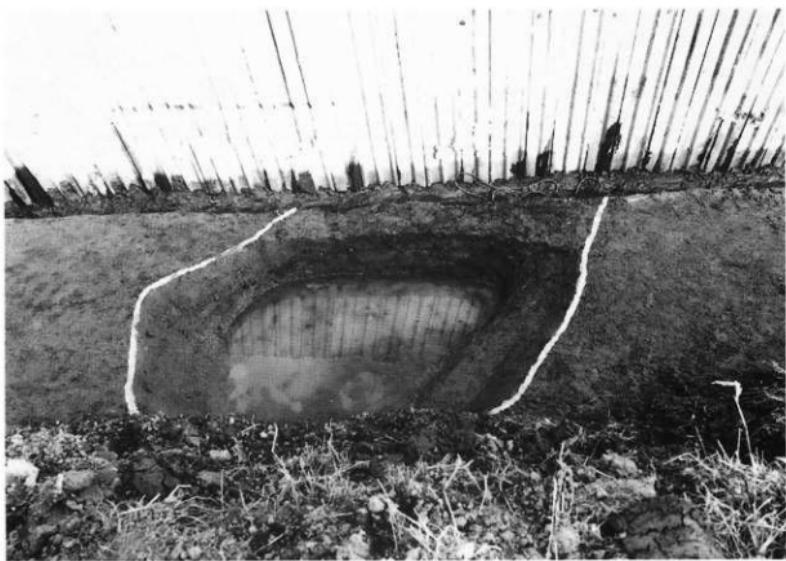
第3章　まとめ

今回の調査では、調査地が狭小であったにも拘わらず、古墳時代前期～中期に比定される遺構・遺物を検出しておらず、この時期を通じて調査地一帯に集落が営まれていたことが明らかとなった。中でも、出土遺物については1区・2区で検出したSD-1から古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される土器類が多量に出土した他、2区で検出したSK-1からは古墳時代前期後半（布留式新相）の陶質の短頸壺が1点出土しており、この時期の陶質土器の在り方や上器類との土器組成を考えるうえで示唆に富む資料を提供している。また両遺構から出土した小形丸底壺においては漆の貯蔵容器として使用されたものが数多く出土しており、古墳時代前期前半～後半（布留式古相～新相）を通じてこの地域に存在した集団の性格や職掌を考えるうえで興味深い内容を示している。

図版



1区 全景（北から）



1区 SD-1検出状況（西から）



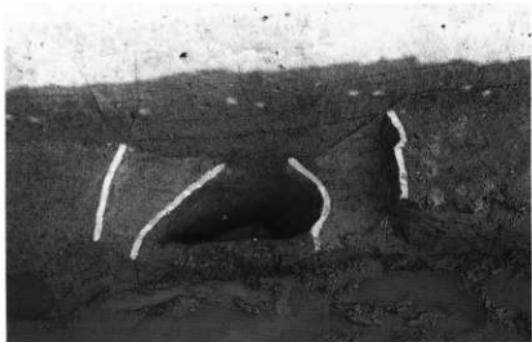
2区 全景（北から）



2区 全景（南から）



2区 SD-1検出状況（北から）



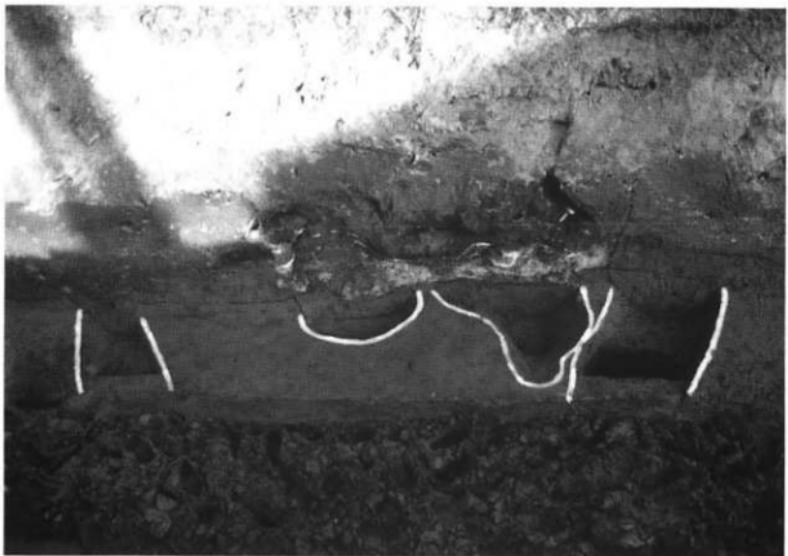
2区 SK-1検出状況（西から）



2区 SK-2、SP-3・4検出状況（南から）



3区 全景（北から）



3区 SD-3・4、SP-5・6検出状況（東から）



4区 全景（北から）



4区 SD-5検出状況（西から）

図版六



5区 全景



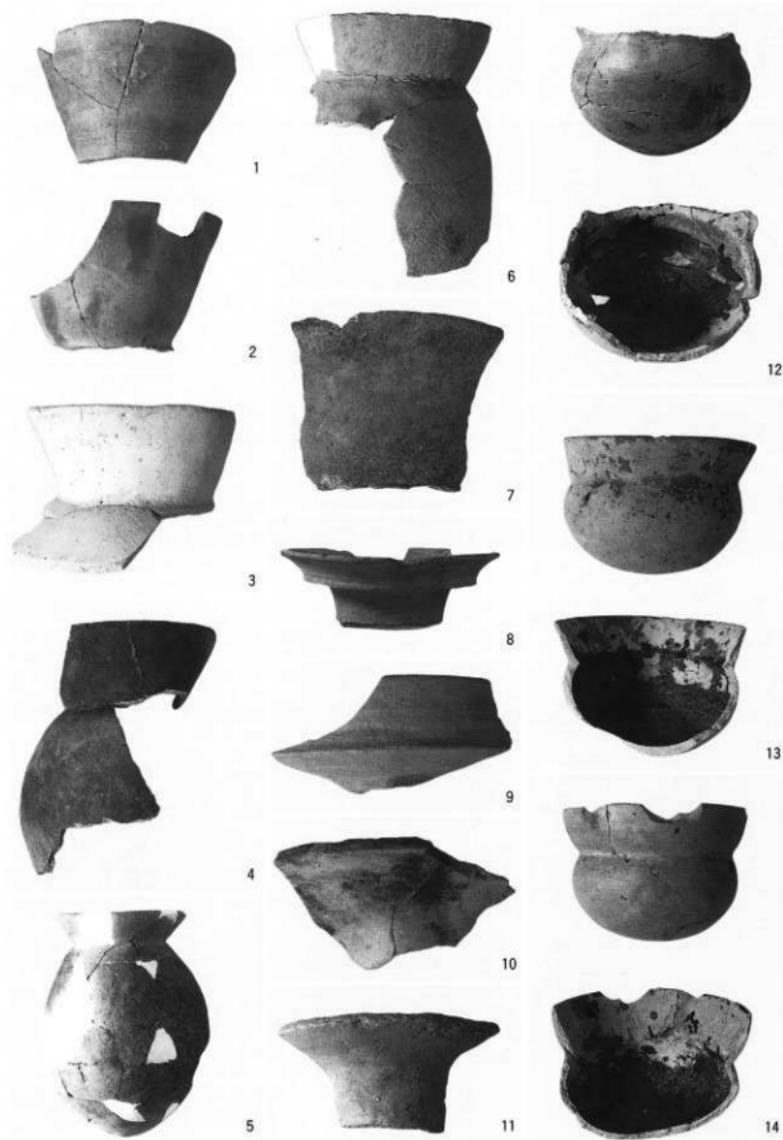
5区 SK-3、SP-7~10検出状況（北から）



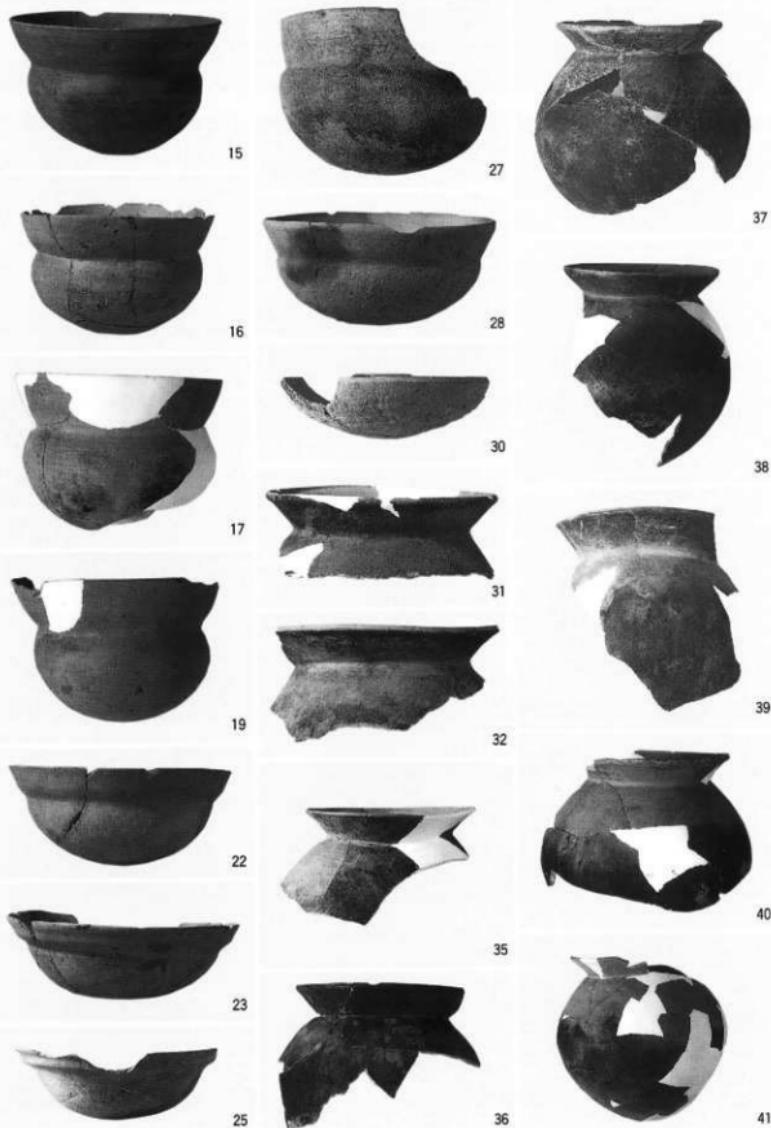
6区 全景（北から）



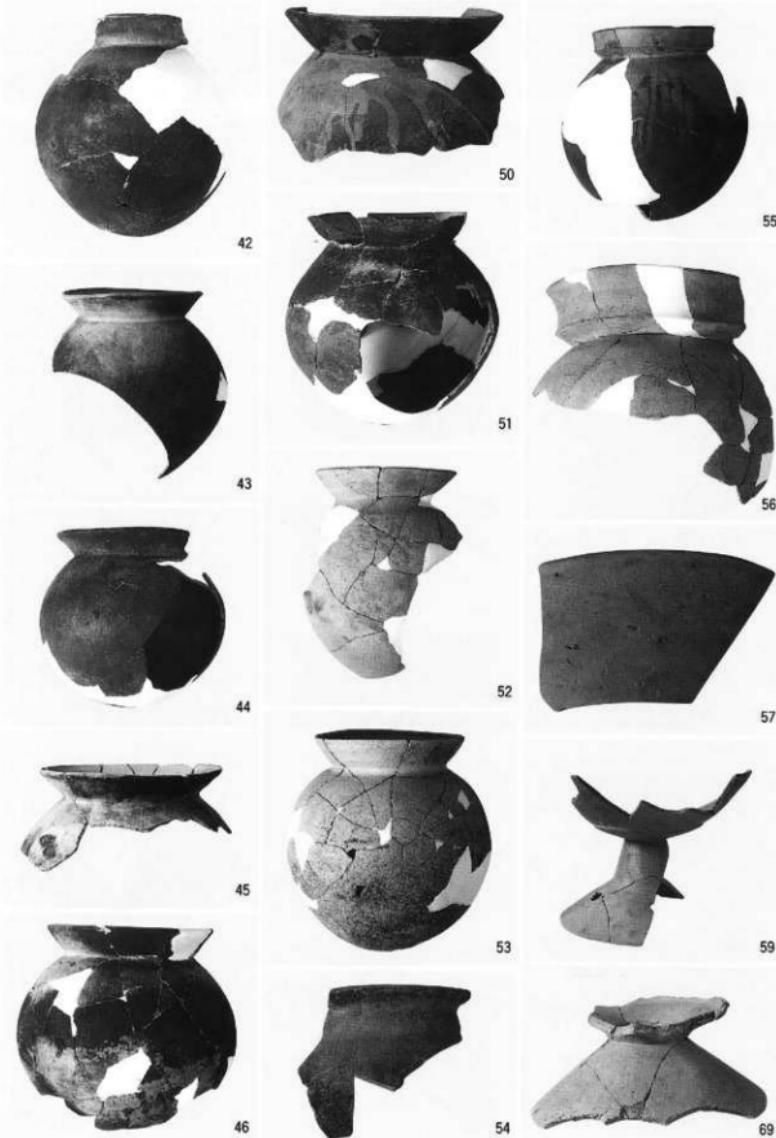
2区 調査風景（北から）



SD-1 (1~14) 出土遺物



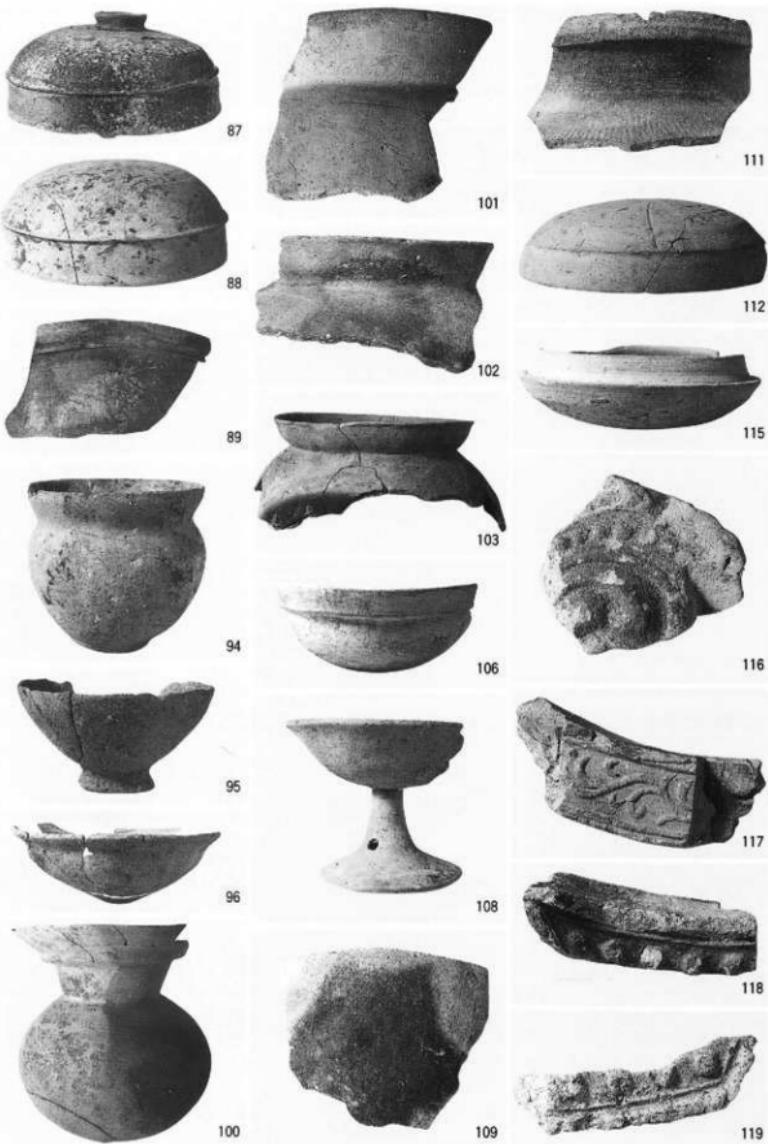
SD-1 (15~17, 19・22・23・25・27・28、30~32、35~41) 出土遺物



S D - 1 (42~46、50~57、59・69) 出土遺物



SD-1 (61・62・65~68)、SK-1 (70・71・73・74・76・79~82・84・85) 出土遺物



SD-3 (87~89)、第4層 (94~96、100~103、106~108~109)

第3層 (111~112~115)、第10~11層 (116~119) 出土遺物

VII 矢作遺跡第3次調査（YH95-3）

例 言

1. 本書は大阪府八尾市南本町8丁目18-2・12、30-3で実施した市営住宅増築工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する矢作遺跡第3次調査(YH95-3)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書(八教社文第埋342-3号 平成7年9月7日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成7年11月27日～12月20日(実働18日間)にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約285m²である。
1. 現地調査においては辻野優子、八田雅美、吉田由美恵が参加した(敬称略、五十音順)。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－坂田典彦(現 岸屋市教育委員会文化財課嘱託)・岸田靖子・辻野優子・村井俊子(敬称略、五十音順)、遺構・遺物の図面トレースおよび遺物写真撮影－岡田が行った。
1. 本書の執筆・編集は岡田が行った。

本 文 目 次

第1章 はじめに	127
第2章 調査概要	128
第1節 調査の方法と経過	128
第2節 基本層序	128
第3節 検出遺構と出土遺物	129
第3章 まとめ	145

挿図目次

第1図 調査地位置および周辺図	127
第2図 潟布区設定図	128
第3図 南壁地層断面図	130
第4図 検出遺構平面図	131-132
第5図 S E 201断面図	133
第6図 S E 202断面図	134
第7図 S E 203断面図	135
第8図 第2面 土坑(S K)断面図	136
第9図 第2面 柱穴(S P)断面図	136
第10図 第2面 溝(S D)断面図	137
第11図 S E 201~203出土遺物実測図	141
第12図 第2面遺構内出土遺物実測図	142
第13図 第4層、第5層出土遺物実測図	143

表目次

第1表 第2面 柱穴(S P)一覧表	138
第2表 第2面 溝(S D)一覧表	139
第3表 出土遺物観察表	143

図版目次

図版 一 第1面	図版 七 S E 203出土遺物
図版 二 第2面	図版 八 S E 203、S D 225・228、第4層出土遺物
図版 三 第2面/部分	
図版 四 S E 202、S E 203	図版 九 S E 201・203、S K 205、第5層出土遺物
図版 五 S E 201、S P 267、調査地周辺	
図版 六 S E 201~203出土遺物	図版一〇 S E 202 曲物

第1章 はじめに

矢作遺跡は八尾市のはば中央に位置する弥生時代後期～中世に至る複合遺跡である。当地域は、古大和川の主流であった長瀬川右岸の自然堤防上に立地し、その範囲は約1km四方におよぶ。現在の行政区画では、明美町2丁目・松山町2丁目・南本町5～8丁目・高美町3～6丁目・安中町6～8丁目がその範囲となっている。当遺跡の周囲には北に成法寺遺跡、北東に小阪合遺跡、東に中田遺跡、西に竜華寺跡が隣接している。また、今回の調査地から北へ約500m地点には、式内社で古代氏族の矢作連の祖神を祀ったとされる矢作神社が鎮座している。

当遺跡が認知されたのは、昭和56年に八尾市教育委員会によって実施された南本町5丁目における住宅建設に伴う遺構確認調査である。本調査では、古墳時代と平安～鎌倉時代の遺構・遺物が見つかった。そして、最初の本格的な発掘調査となつたのが、昭和61年に同市教委によって実施された高美町3丁目の共同住宅建設に伴う調査である。^{註1} 本調査では、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての溝、古墳時代後期の掘立柱建物・溝が検出された。このなかで特筆すべきものに、古墳時代前期の溝内で小型の変形四獸鏡を蓋にして倒立の状態で見つかった壺がある。さらに翌年、先述の調査地から南東へ約150m地点で当研究会によって実施された八尾税務署建設に伴う調査では、^{註2} 平安時代後期～鎌倉時代後期にかけての掘立柱建物・井戸・土坑・池状遺構・溝といった居住域を示す遺構とともに多量の遺物が検出された。以後も当遺跡は、市教委および当研究会によって数次に亘る調査が実施され、弥生時代後期～中世に至るまでの複合遺跡として周知されている。なお、今回の調査地点から西へ約100m地点で、平成2年度に市教委によって老人福祉センター増築に伴う遺構確認調査が実施されおり、現地表下約1.6m前後で層厚0.1m前後を測る中世の遺包含層を確認している。^{註3}

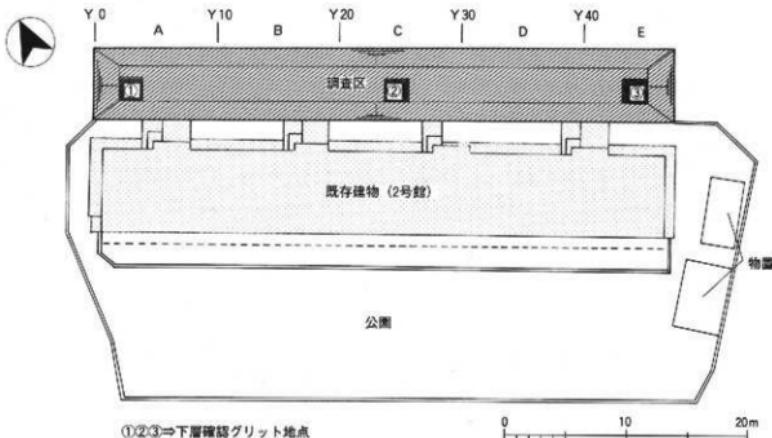


第1図 調査位置および周辺図 (S=1/5000)

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は市営住宅増築工事に伴うもので、調査面積は東西長約47m・南北幅約6mの約282m²を測る。調査は八尾市教育委員会の指示書に従い、現地表(T.P.+10.7m前後)下、約1m間に堆積する盛土および近・現代の耕作土層を重機によって除去した後、以下0.4m前後の平安時代～鎌倉時代に比定される堆積層を人力で掘削し、遺構および遺物の検出に努めた。なお、調査終了後は、調査区の西部・中央部・東部の3箇所に各2m四方のグリットを設定し、最終遺構面からさらに1m前後を掘削して下層確認調査を実施した。調査区内の地区割りについては、各調査区の西端部に任意の基準点を設置し、西側から10m間隔でA～E区と呼称した。



第2図 調査区設定図 (S=1/400)

第2節 基本層序

第0層：既存建物基礎に伴う盛土である。層厚0.8m前後。

第1層：5B2/1青黒色シルト。近・現代の耕作土である。層厚0.1～0.3m。

第2層：10G4/1暗緑灰色砂疊混じりシルト。層厚0.1m前後。近世の国産陶磁器片を若干含む土である。調査区の東半部では、本層の下面(T.P.+9.7m前後)で近世の耕作溝群を検出した(第1面)。

第3層：7.5YR6/3にぶい褐色シルト。層厚0.5～0.25m。東に向かうにつれ層厚を増す。

第4層：5GY3/1暗オリーブ灰色砂疊混じりシルト。層厚0.1～0.3m。調査区の東半部に堆積する。平安時代～鎌倉時代にかけての土器類・須恵器・黒色土器・瓦器等を含む。本層の下面(T.P.+9.4m前後)で当該期の遺構を検出した。

第5層：7.5YR7/6橙色砂疊混じりシルト。層厚0.15m前後。調査区の西半部に堆積する。第4層に比して砂疊を多く含み、粘性に富む。第4層と同時期の遺物を含む。本層の下面(T.P.+9.5m前後)で当該期の遺構を検出した。

第6層：7.5YR4/4褐色シルト。層厚0.15m前後。調査区の東端部にのみ堆積する。第4・5層と同時期の遺物を若干含む。本層の下面(T.P.+9.4m前後)で当該期の遺構を検出した。

第7層：10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト。層厚0.1m前後。東部の一部に堆積する。第4～6層と同時期の遺物を若干含む。

第8層：5BG4/1暗青灰色シルト。層厚0.05～0.2m。部分的に下位層との層理面に粗粒砂層が挟在する。

第9層：10BG5/1青灰色砂質シルト。層厚0.2～0.4m。部分的に細粒砂を挟在する水成層である。

第10層：5PB7/1明青灰色シルト。層厚0.15～0.5m。水成層で、東部で局所的に未分解の植物遺体が混在する。

※以下、下層確認グリット①～③で確認した堆積層である。

第11層：N6/0灰色粘土質シルト。層厚0.3m前後。調査区の東西両端部にあたる下層確認グリット①・③で確認した。植物炭化物ラミナが多く含まれる。

第12層：5B5/1青灰色砂質シルト。層厚0.2m前後。下層確認グリット②・③で確認した。水成層で、植物炭化物ラミナが若干見られる。

第13層：5B3/1暗青灰色シルト。層厚0.1～0.2m。植物炭化物が多く含まれ、全体的に暗色を呈する。

第14層：N7/0灰白色細粒砂。層厚0.2m以上。河成堆積層と推定されるもので、水流方向がラミナの傾斜から南東→北西方向であることがわかる。

第3節 検出遺構と出土遺物

【検出遺構】

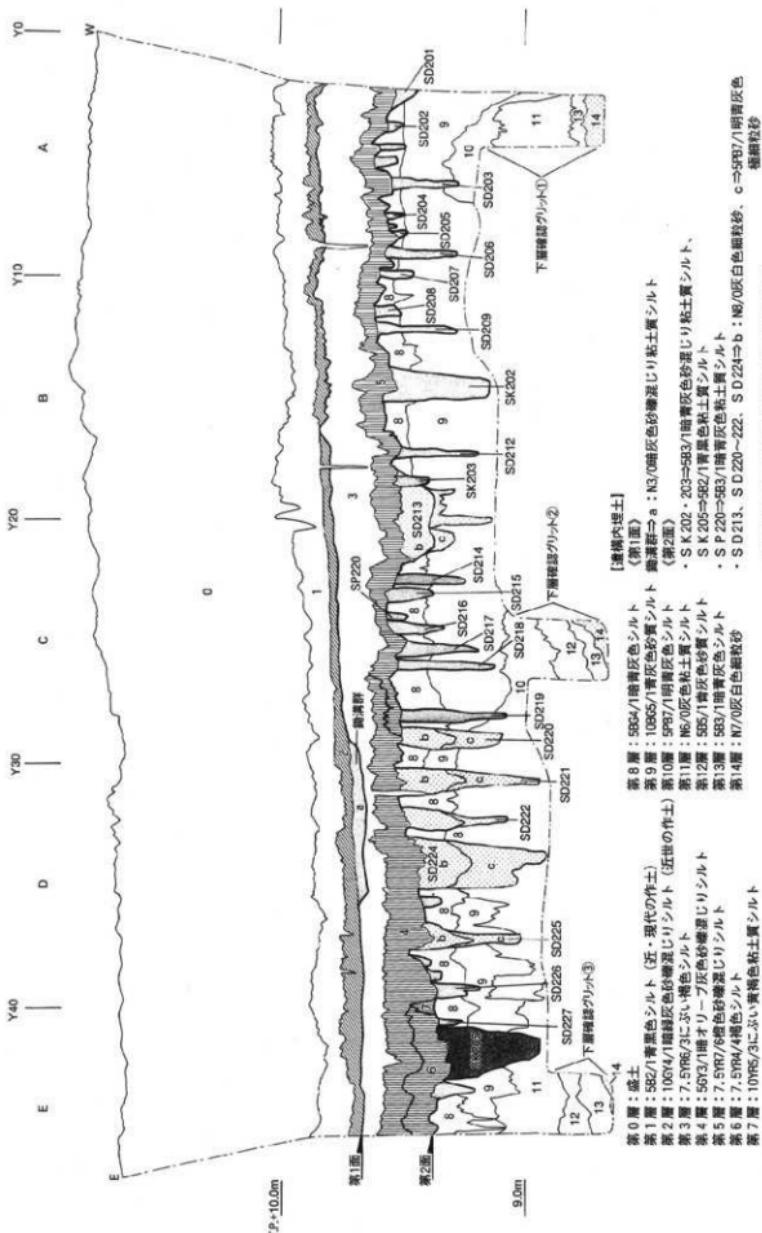
《第1面》

鉋溝群

T.P.+9.7m前後を測る第2層下面において、近世に比定される数条の溝群を検出した。これらは耕作に伴う鉋溝と考えられるもので、検出範囲は調査区の東半部である。西半部については半断面の観察から近現代の耕作に伴い削平されたものと思われる。すべて東西方向に伸びるもので、幅0.1～0.5m、深さ0.1～0.15mを測る。各溝内からは、17～18世紀頃の肥前系の染付け磁器片が少量出土したが、図化できるものはなかった。

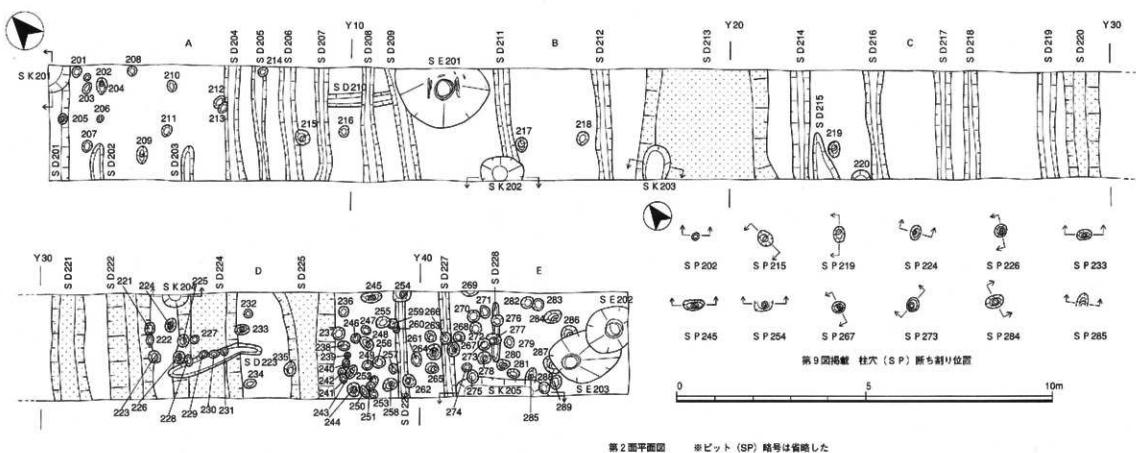
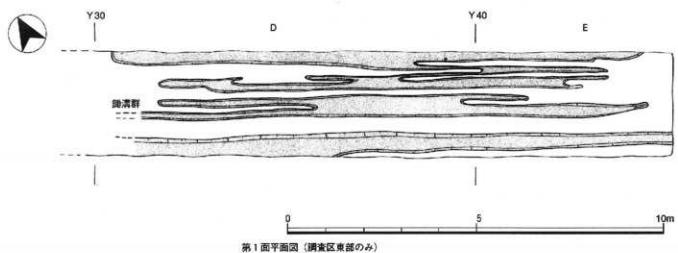
《第2面》

T.P.+9.4m前後を測る第4層下面において、平安時代～鎌倉時代にかけての井戸3基(S E 201～203)、土坑5基(S K 201～205)、柱穴89個(S P 201～289)といった居住域に関連する遺構と、農耕に伴うと考えられる鉋溝および水路を合わせて28条(S D 201～228)を検出した。なお、以上の遺構については同一面で検出したが、後者の生産域に関連する溝については居住域に関連する遺構との切合い関係からすると古く、時期差がある。



第3図

南豊地断面図 (縦 S = 1/20、横 S = 1/20)



第4図 検出遺構平面図 (S=1/100)

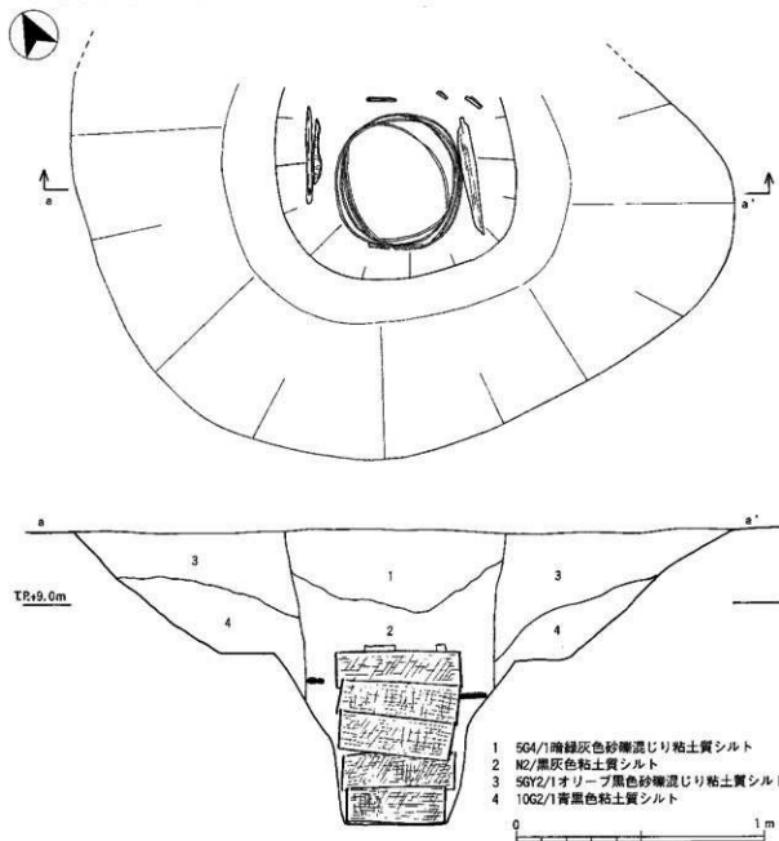
井戸(S E)

S E 201

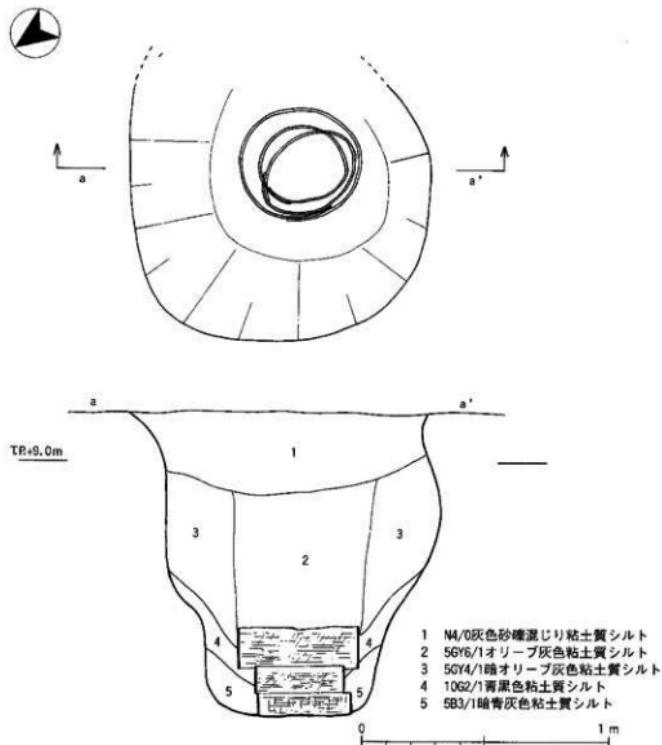
B区西部の北壁際で検出した曲物井戸である。掘方の北部は調査区外に至るため詳細は不明であるが、底部には曲物5段分が遺存していた。掘方の検出規模は、最大径2.6m、深さ1.22mを測る。曲物は、直径約48cm、深さ約15cmの法量を呈する。曲物の四方には、固定のための板材が組み込まれている。遺物は井戸側内および掘方内から11世紀代に比定される土師器小皿、瓦器碗、瓦が出土した。

S E 202

E区東端部の東壁際で検出した曲物井戸である。掘方の東部は調査区外に至るため詳細は不明



第5図 S E 201 平断面図 (S=1/20)



第6図 S E 202 平断面図 (S=1/20)

であるが、底部には曲物が上から3段分遺存していた。掘方の検出規模は、最大径1.2m、深さ1.25mを測る。曲物については各大きさが大・中・小と異なり、大が一段目で直径約50cm、深さ約17cm、中が3段目で直径約38cm、深さ約10cm、小が2段目で直径約36cm、深さ約8cmの法量をそれぞれ呈する。遺物は井戸側内から9世紀後半～10世紀前半に比定される土師器椀、土師器甕が出土した。

S E 203

E区東端部で検出した曲物井戸である。掘方の北東部はS E 202によって切られているため詳細は不明であるが、底部には曲物3段分が遺存していた。掘方の検出規模は、最大径1.6m、深さ0.95mを測る。曲物は、大きさが大・小と2種類があり、大が一段目と2段目で直径約50cm、深さ約15cm、小が3段目で直径約40cm、深さ約10cmの法量をそれぞれ呈する。遺物は井戸側内から9世紀後半～10世紀前半に比定される土師器椀、土師器甕が出土した。

土坑(S K)

S K 201

A区の北西隅で検出した。掘方の北部および西部は調査区外に至るため、全容は不明である。掘方は検出部で最大径0.75m、深さ0.33mを測る。埋土は炭粒と偽縄を多く含む暗褐色の粘土質シルトの単一層で、土師器小皿、瓦器椀のそれぞれ破片が出土した。

S K 202

B区中寄りの南壁際で検出した。掘方の南部は調査区外に至るため、全容は不明である。掘方は検出部で最大径0.75m、深さ0.33mを測る。埋土は暗青灰色砂礫混じり粘土質シルトの単一層で、瓦器椀の小破片が少量出土した。

S K 203

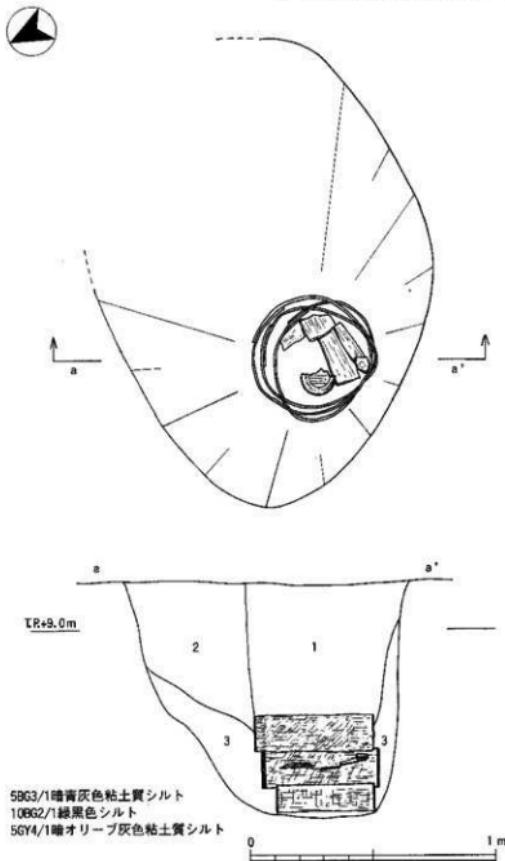
B区東部の南壁際で検出した。掘方の南部は調査区外に至るため、全容は不明である。掘方は検出部で最大径0.9m、深さ0.15mを測る。埋土は暗青灰色砂礫混じり粘土質シルトの単一層で、遺物は出土しなかった。

S K 204

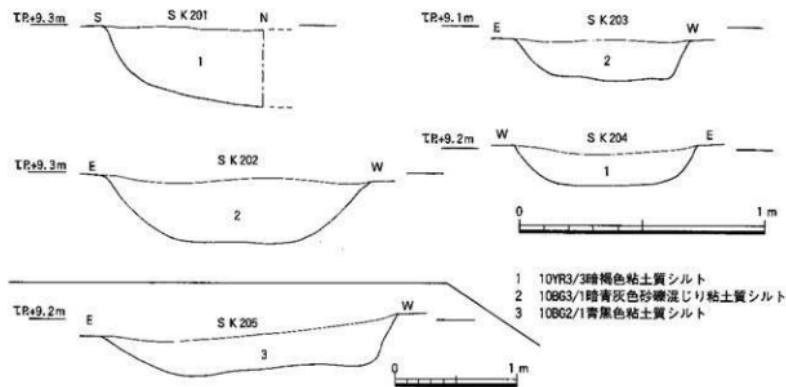
D区西部の北壁際で検出した。掘方の北部は調査区外に至るため、全容は不明である。掘方は検出部で最大径0.75m、深さ0.17mを測る。埋土は炭粒と偽縄を多く含む暗褐色の粘土質シルトの単一層で、内部から10世紀後半頃に比定される黒色土器椀のほか、土師器小皿の小破片が出土した。

S K 205

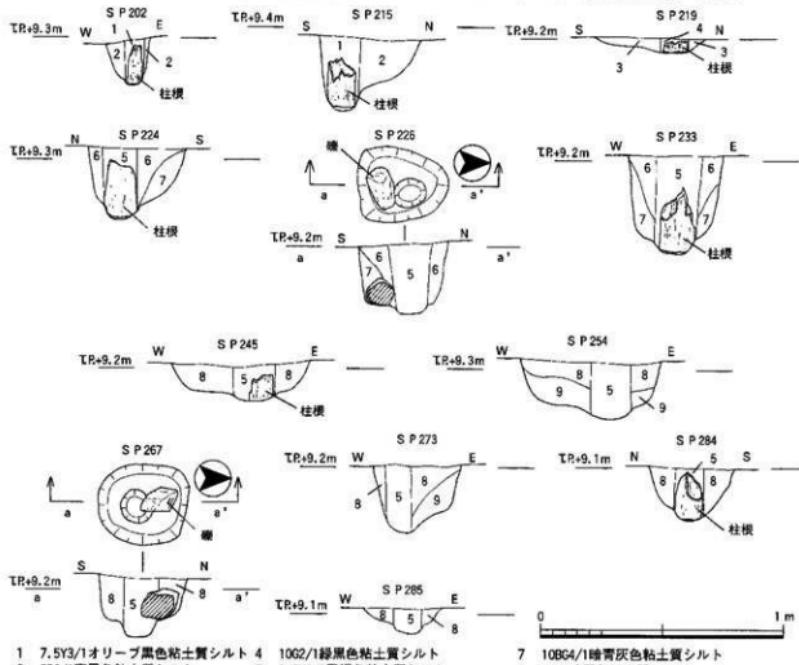
E区中寄りの南壁際で検出した。掘方の南部は調査区外に至るため、全容は不明である。掘方の北西部をS P 275、東部をS P 288によって切られる。掘方は検出部で最大径2.42m、深さ0.37



第7図 S E 203 平断面図 (S-1/20)



第8図 第2面 土坑(SK)断面図(スケール: SK 201~204⇒S=1/20、SK 205⇒1/40)



第9図 第2面 柱穴(SP)断面図(S=1/20)

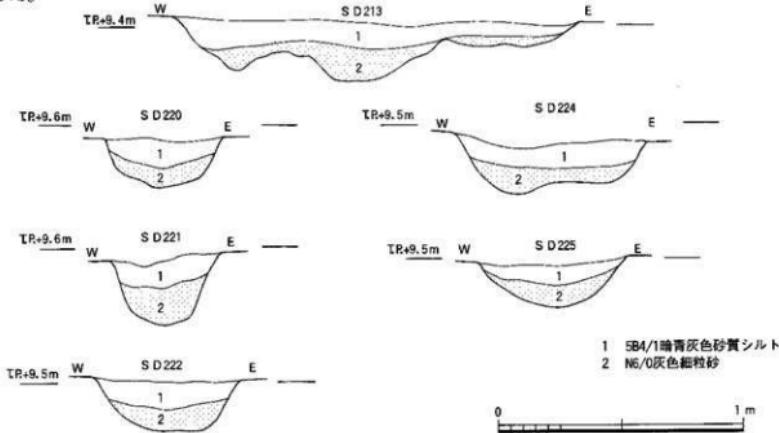
mを測る。埋土は炭粒を多量に含む青灰色粘土質シルトの單一層で、遺物は10世紀後半頃に比定される黒色土器楕、土師器鉢のほか、平瓦が出土した。

柱穴(S P)

柱根あるいは柱痕が確認されるもの、さらにそれらと掘方や埋土の類似性が見出せるものを柱穴と判断した。総数は89基で、分布状況としては東部に集中する。建物の復元については柱の通りは見られるものの、柱間が一定せず建物として組めないことや個々の柱穴の掘方プランや埋土が異なることから明確に認識できるものはなかった。平面形状は、円形あるいは椭円形を呈するものがほとんどである。規模は径17~57cm、深さ5~44cmを測る。埋土は青灰色系の粘土質シルトが大半を占め、一部には炭粒を含んだものも見られる。これらの柱穴から出土した遺物は少なく、土師器、黒色土器、瓦器等の小片化したものが多い。なお、各柱穴の法量、形状等については第1表に掲載した。

溝(S D)

すべて農耕に伴うと考えられる溝であるが、法量と埋土の相違から鍛溝と水路と推定される2種に分別できる。鍛溝と考えられるものは、SD 201~212・214~219・223・226~228の22条、そして水路と考えられるものは、SD 213・220~225の7条である。規模は鍛溝が幅22~58cm、深さ3~43cm、水路は幅85~158cm、深さ17~54cmをそれぞれ測る。方向ではSD 210・223の2条を除き、すべて南北方向に並行して伸びる。双方の埋土は、鍛溝が灰褐色砂礫混じりシルトの單一層、水路については上層が暗青灰色砂質シルト、下層が灰色細粒砂の2層に分層できる。また、水路についてはラミナの傾斜と底面レベルの高低差から、南→北の流路方向がわかる。これらの溝については、先述の井戸、土坑、柱穴といった居住域に関連する遺構に切られる関係から、居住域が形成される以前の生産域を示すものと言える。時期については、各溝の出土遺物から平安時代初頭~前期頃と推定される。なお、各溝の法量および出土遺物等については第2表に掲載した。



第10図 第2面 溝(S D)断面図 (S=1/20)

第1表 第2面 柱穴 (S P) 一覧表

SP番号	検出地区	長径-短径(cm)	深さ(cm)	平面形状	出土遺物	備考
SP201	A	30-23	18	円形		
SP202	A	21-18	18	円形		柱根遺存
SP203	A	36-21	25	楕円形	土師器、瓦器	
SP204	A	47-28	5	楕円形		
SP205	A	29-26	34	円形		
SP206	A	22-18	8	円形	土師器、瓦器	
SP207	A	35-26	15	円形		
SP208	A	28	24	円形		
SP209	A	48-30	12	楕円形		
SP210	A	36-28	20	楕円形		
SP211	A	35-28	13	円形	瓦器	
SP212	A	38-22	32	楕円形		
SP213	A	35-21	30	楕円形		SP212に切られる
SP214	A	29-24	48	円形		
SP215	A	41-39	26	円形	土師器	柱根遺存
SP216	A	32-27	15	円形		
SP217	B	39-33	18	楕円形	土師器、瓦器	
SP218	B	37-33	14	円形		
SP219	C	45-31	6	楕円形		柱根遺存
SP220	C	50-28	9	不明	黒色土器	北側は調査区外
SP221	D	34-26	29	円形		
SP222	D	29-18	32	楕円形		
SP223	D	38-33	37	円形	土師器	
SP224	D	41-39	29	楕円形		柱根遺存
SP225	D	35-29	28	円形		
SP226	D	37-30	25	円形		根石?
SP227	D	26-21	30	円形	土師器、瓦器	
SP228	D	34-22	26	楕円形		
SP229	D	27-20	34	楕円形		
SP230	D	29-22	18	楕円形		
SP231	D	24-22	11	円形		
SP232	D	25	13	円形		
SP233	D	39-28	41	楕円形	土師器、黒色土器	柱根遺存
SP234	D	35-27	14	楕円形		
SP235	D	39-32	19	円形		
SP236	D	28	20	円形	土師器	
SP237	D	36-32	19	円形		
SP238	D	34-28	20	楕円形	瓦器	
SP239	D	19-17	22	円形		
SP240	D	24-22	20	円形		SP239に切られる
SP241	D	28-20	19	楕円形		
SP242	D	22-17	21	円形		SP241に切られる
SP243	D	38-25	19	楕円形		
SP244	D	38-32	20	圓丸形	瓦器、瓦	
SP245	D	57-28	17	楕円形		柱根遺存
SP246	D	28-25	21	円形		
SP247	D	28-22	31	円形		
SP248	D	43-27	24	楕円形		
SP249	D	30-26	20	円形		
SP250	D	36-21	22	楕円形		
SP251	D	26-25	23	円形		
SP252	D	24-18	23	円形	七輪器、瓦	SP251に切られる
SP253	D	25-22	21	円形		
SP254	D	49-28	24	圓丸形?	土師器、黒色土器	北側は調査区外
SP255	D	39-30	27	楕円形		
SP256	D	35-30	17	円形		
SP257	D	26-24	21	円形		
SP258	D	42-30	20	楕円形	土師器、黒色土器	
SP259	D	25	30	円形		SP255に切られる
SP260	D	14-20	22	円形		SP259に切られる
SP261	D	41-27	24	楕円形	黒色土器	
SP262	D	38-35	44	円形		
SP263	E	32-30	34	円形		
SP264	E	42-38	9	円形	土師器、黒色土器	
SP265	E	37-29	32	円形		
SP266	E	35-28	34	円形		

SP番号	検出地区	長径一短様(cm)	深さ(cm)	平面形状	出土遺物	備考
SP267	E	37~33	24	円形	瓦器	根石?
SP268	E	33~27	10	円形		
SP269	E	48~12	17	不明		北部は調査区外
SP270	E	32	27	円形		
SP271	E	37~27	29	横円形	土師器、瓦器	
SP272	E	32	24	円形		
SP273	E	35~32	27	円形	土師器	
SP274	E	29~22	24	円形		
SP275	E	37~29	26	横円形		
SP276	E	35~30	27	円形		
SP277	E	40~30	22	横円形		SP267に切られる
SP278	E	37~29	27	円形		
SP279	E	31~28	21	円形	瓦器、瓦	
SP280	E	37~26	9	横円形		
SP281	E	34~25	23	横円形	瓦器	
SP282	E	35~30	17	円形		
SP283	E	33~32	19	円形		
SP284	E	49~35	22	横円形		
SP285	E	35~32	10	不明	土師器、黒色土器	柱根遺存
SP286	E	45~28	8	不明	土師器、黒色土器	SE203に切られる
SP287	E	54~25	30	不明	土師器、瓦	SE203に切られる
SP288	E	32	9	円形		SK205に切られる
SP289	E	38~33	17	円形		

第2表 第2面 溝(SD)一覧表

SD番号	検出地区	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	性格	備考
SD201	A	50以上	8~11	土師器皿、土師器碗	断溝	西向は調査区外、SK201、SP205に切られる
SD202	A	33	5~7		断溝	
SD203	A	31	13~15		断溝	
SD204	A	35~58	4~6		断溝	SP212・SP213に切られる
SD205	A	22~39	3~4	羽笠	断溝	
SD206	A	40~48	27~31		断溝	SP215に切られる
SD207	A	37~40	10~14		断溝	
SD208	B	30~55	11		断溝	
SD209	B	43	30	土師器	断溝	SE201に切られる
SD210	B	38	12	黑色土器碗	断溝	SD207~209に切られる
SD211	B	39~42	9		断溝	SK202に切られる
SD212	B	35~48	30~33		断溝	
SD213	B~C	318~378	17~48	須恵器甌、黒色土器碗	水路	SK203に切られる
SD214	C	38~50	25~31		断溝	
SD215	C	30~71	18~21	平瓦	断溝	
SD216	C	35~41	21~24		断溝	
SD217	C	40	38~43		断溝	
SD218	C	35~47	41	平瓦	断溝	
SD219	C	48~51	37~42		断溝	
SD220	C	87~92	35~42	土師器碗、黒色土器碗	水路	
SD221	D	85~90	55~58	土師器皿	水路	
SD222	D	110	41~47	黑色土器碗	水路	SP221~223に切られる
SD223	D	25~42	7~12		断溝	
SD224	D	152~181	42~54	土師器皿	水路	SK204・SD223・SP225~231・233に切られる
SD225	D	111~158	33~38	土師器碗、黒色土器碗	水路	SP235・237に切られる
SD226	D	25~31	12~18		断溝	SP254・259・260・262に切られる
SD227	E	29~32	8~10		断溝	SP266・267に切られる
SD228	E	17~21	7		断溝	SP276・277に切られる

【出土遺物】

《第2面遺構内》

S E 201

井戸側内から出土した土師器皿4点(1～4)・瓦器椀1点(5)・黒色土器椀1点(6)、掘方埋土内から出土した黒色土器椀1点(7)と平瓦1点(8)の計8点を図化した。1は底部から口縁部にかけての立ち上がりが不明瞭なものである。2は口縁部が体部から直線的に伸びるもので、端部はやや受け口状を呈する。3は他のものに比べ器壁が薄く、口縁部の形態はいわゆる「て」の字状口縁を呈する。4は器壁がやや厚めで、丸底と見られる底部から内灣気味に伸びる口縁部に至る。内面にはヘラ状工具痕が認められる。5は内底面ともに密なヘラミガキが施され、高台は断面三角形のしっかりしたものである。6・7は内黒のA類椀で、ヘラミガキの幅は比較的太く、高台径が狭い。以上の遺物は11世紀代に比定される。8は凸面に縦方向の繩タタキ目、凹面に布目を有す。側縁はナデ調整である。

S E 202

井戸側内から出土した土師器椀5点(9～13)・土師器甕1点(14)の計6点を図化した。9～11は、口縁部が底部からほぼ直線的に立ち上がるのに対し、12・13は緩やかな「S」字形を描いて立ち上がる。また、底部の形態では、平底(9～11)と丸底(12)に分けられる。14は胴部球形のもので、口縁部は肥厚して短く立ち上がり、内傾する端面を有する。体部外面にはユビオサエ痕が顕著に見られる。以上の遺物は9世紀後半～10世紀前半に比定される。

S E 203

井戸側内から出土した土師器椀8点(15～22)・黒色土器椀5点(23～27)、掘方埋土内から出土した黒色土器椀1点(28)・土師器羽釜1点(29)・丸瓦1点(30)の計16点を図化した。15～22はいずれも口縁部を強いヨコナデで調整するものである。先述の12・13のような緩やかな「S」字形を描いて立ち上がる口縁部を呈するものは、15・18・22である。20の底部はやや窪み底を呈する。23～28はすべて黒色土器A類椀である。いずれも内面のヘラミガキは細く密に施され、高台は短く作りは丁寧である。29は外反する口縁部を有し、鈴は口縁屈曲部に近いところに付く。胎土いわゆる生駒西龍産である。体部は欠損しているが、おそらく長胴形を呈するものと思われる。以上の遺物は9世紀後半～10世紀前半に比定される。30は凸面の大半がナデ調整されるが、一端には平行タタキ痕が明瞭に残る。凹面には布目のほかに、吊り紐痕が見られる。側縁はナデ調整である。胎土は粗く、3～5mmの砂粒を多量に含む。

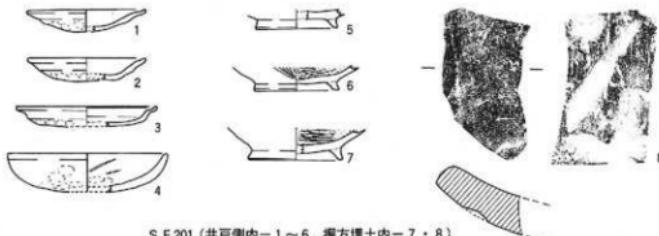
S K 204

黒色土器B類椀1点(31)図化した。内外面ともにいぶし焼きされ、細く密なヘラミガキが施される。高台は断面三角形を呈する。10世紀後半頃に比定される。

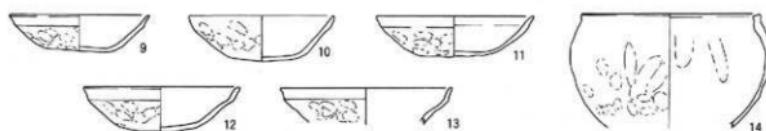
S K 205

黒色土器椀B類(32)、土師器鉢(33)、平瓦(34)の3点を図化した。32は体部片のみの残存である。内外面ともに細く密なヘラミガキが施される。33は精良な胎土を有するもので、外面をユビオサエ、内面をヘラナデ、口縁部は強いヨコナデを施す。内面には、二次焼成を受けたことを示す煤が付着する。これらは10世紀後半頃に比定される。34は凸面に縦方向の繩タタキ目、凹面に布目を有す。側縁はナデ調整である。

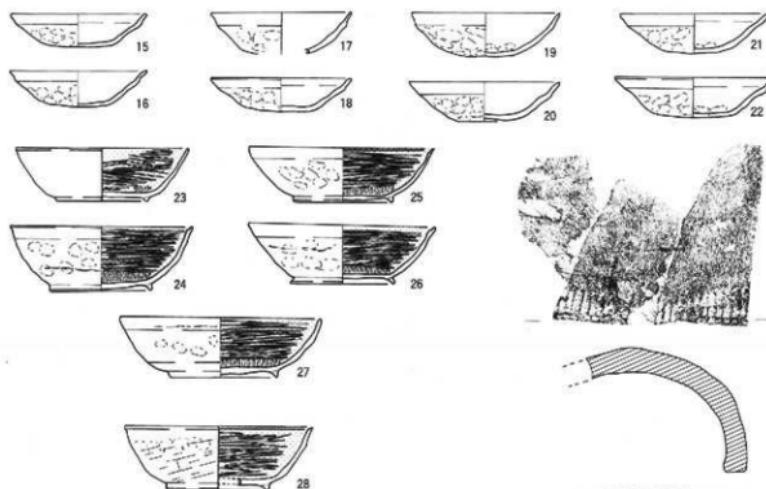
図 矢作遺跡第3次調査(YH95-3)



S E 201 (井戸側内-1~6、掘方埋土内-7~8)

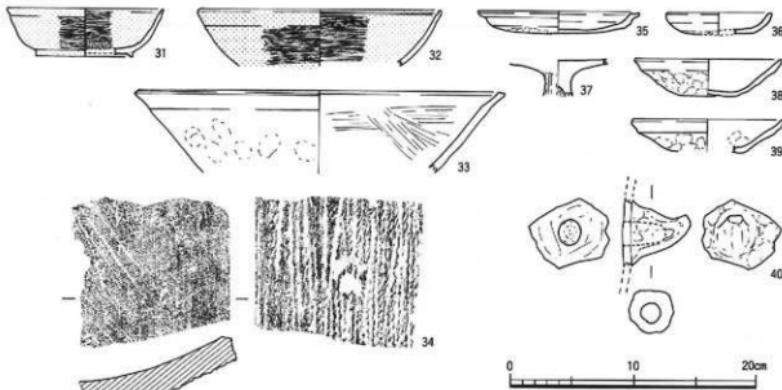


S E 202 (9~14 すべて井戸側内)



S E 203 (井戸側内-15~27、掘方埋土内-28~30)

第11図 S E 201~203出土遺物実測図 (S = 1/4)



S K 204 (31)、S K 205 (32~34)、S P 203 (35)、S P 246 (36)、S D 225 (37)、S D 228 (38~40)

第12図 第2面造構出土遺物実測図 (S=1/4)

S P 203

土師器皿1点(35)を図化した。口縁部は「て」字状を呈し、底部は平坦である。10世紀後半頃に比定される。

S P 246

土師器皿1点(36)を図化した。器壁はやや厚めで、口縁端部は丸くおさめる。10世紀前半頃と推定される。

S D 225

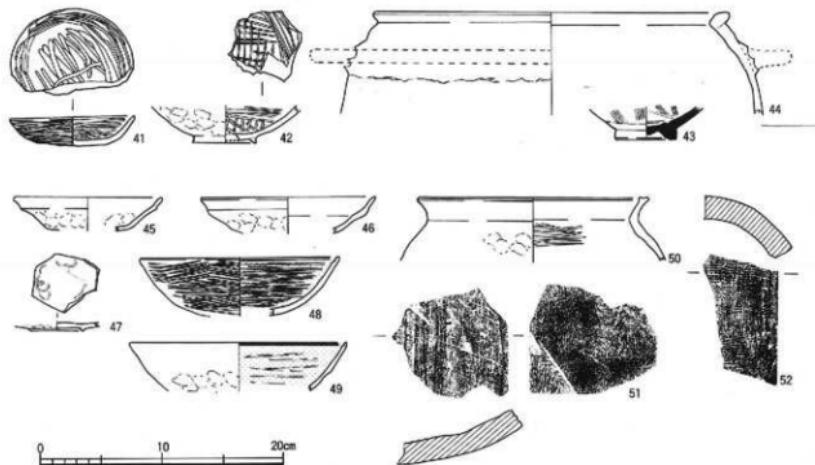
高杯1点(37)を図化した。杯部と柱脚部の境部分のみの残存である。杯底部は平坦で、柱状部内面にはシボリメが見られ、外面は縦方向にヘラナデされる。時期は不明である。

S D 228

土師器椀2点(38・39)と土師器把手(40)の3点を図化した。38・39はいずれも外面のエビオサエ痕が明瞭に認められる。しかし、口縁部の形態を見ると、斜上方に直線的に伸びる38に対し、39は緩やかな「S」字形を描いて立ち上がる。40は壺あるいは鍋の把手と思われるもので、内面から径1.5cm前後、長さ約3.5cmの孔が穿たれる。以上は10世紀前半頃に比定されるものと思われる。

《第4層》

瓦器小皿1点(41)、瓦器椀1点(42)、青磁碗1点(43)、土師器羽釜1点(44)の3点を図化した。41は平坦な底部からやや丸みをもって立ち上がる口縁部に至り、口縁端部はややつまみ上げる。調整は見込みに太い平行暗文、内外面は密にヘラミガキする。42は断面三角形の短い高台がつくもので、見込みには格子状の暗文が施される。43は比較的精良な胎土で、内外面には櫛状の工具による刷毛目文様が認められる。形態および文様の様子から同安窯系と推察される。44は貼り付けによる鉢部が欠損している。口頭部は内傾し、口縁端部は玉縁状にやや丸くおさめる。41・42は12世紀後半、43は13世紀前半に比定される。



第13図 第4層(41~44)、第5層(45~52)出土遺物実測図(S=1/4)

《第5層》

土師器椀3点(45~47)、黒色土器A類椀2点(48・49)、土師器甕1点(50)、平瓦1点(51)、丸瓦1点(52)の計8点を図化した。45・46はいずれも強いヨコナデと緩やかな「S」字形を描く口縁部を呈する。47は非常に短小な断面三角形の高台が付き、見込みには暗文が施される。48・49はともに内外面ともに細く密なヘラミガキが施されるが、48は摩滅が著しく、49は胎土がやや粗い。50は口縁端部が内外に肥厚し、上面がやや窪む。内外面には二次焼成によって煤が付着する。以上の遺物は、10世紀台の所産と考える。51・52の凹面はいずれも布目を有し、凸面については51が縦方向の縄目タタキ、52がナデである。

以上、記載した遺物の各法量・調整等については第3表に掲載した。

第3表 出土遺物観察表

遺物番号	種類	出土地点	法量(cm)	調整・文様等	色調 外 内	遺存度
1	土師器皿	SE201 (井戸側内)	口径 (9.4) 器高 (1.8)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	乳白色	1/4
2	土師器皿	同上	口径 (9.2)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	乳白色	1/3
3	土師器皿	同上	口径 (11.0)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	にぶい褐色	1/3
4	土師器皿	同上	口径 (12.6)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ヘラナデ	にぶい褐色	1/3
5	瓦器椀	同上	高台径 (6.8)	(外) ヨコナデ、ナデ (内) ヘラミガキ	黒灰色	底部1/2
6	黒色土器 A類椀	同上	高台径 (7.0)	(外) ヨコナデ、ヘラミガキ (内) ヨコナデ、ヘラミガキ	褐色 黒色	底部1/2
7	黒色土器 A類椀	SE201 (井戸側内)	高台径 (7.8)	(外) ヨコナデ、ナデ (内) ヘラミガキ	灰褐色 黒色	底部1/2
8	平瓦	同上	—	(外) 縄目タタキ (内) 布目	にぶい褐色	破片
9	土師器椀	SE202 (井戸側内)	口径 (11.6) 器高 (2.9)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	灰褐色	ほぼ完形

遺物番号	種類	出土地点	法量 (cm)	調整・文様等	色調 外 内	遺存度
10	土師器輪	SE202 (井戸側内)	口径 (11.6) 器高 (3.8)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	にぶい褐色	1/4
11	土師器輪	同上	口径 (11.2) 器高 (3.4)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	にぶい褐色	2/3
12	土師器輪	同上	口径 (12.5) 器高 (3.9)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	褐色	ほぼ完形
13	土師器輪	同上	口径 (13.9)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	褐色	口縁部～ 体部1/3
14	土師器輪	同上	口径 (14.4) 体部最大径 (16.6)	ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	橙色	口縁部～ 体部1/3
15	土師器輪	SE203 (井戸側内)	口径 (10.8) 器高 (2.6)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	にぶい褐色	1/2
16	土師器輪	同上	口径 (11.0)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	にぶい褐色	5/6
17	土師器輪	同上	口径 (11.4)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	褐色	口縁部～ 体部1/3
18	土師器輪	同上	口径 (11.2) 器高 (2.8)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	にぶい褐色	5/6
19	土師器輪	同上	口径 (11.8) 器高 (3.5)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	にぶい褐色	1/2
20	土師器輪	同上	口径 (12.0) 器高 (3.4)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	にぶい褐色	5/6
21	土師器輪	同上	口径 (12.0) 器高 (3.3)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	にぶい褐色	ほぼ完形
22	土師器輪	同上	口径 (12.8) 器高 (3.4)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	にぶい褐色	ほぼ完形
23	黒色土器 A類輪	同上	口径 (13.9) 器高 (5.3) 高台径 (7.2)	(外) ヨコナデ、ナデ (内) ヨコナデ、ヘラミガキ	褐色 黒色	1/3
24	黒色土器 A類輪	同上	口径 (13.9) 器高 (4.4) 高台径 (8.2)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ (内) ヨコナデ、ヘラミガキ	褐色 黒色	ほぼ完形
25	黒色土器 A類輪	同上	口径 (13.9) 器高 (4.9) 高台径 (8.2)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ (内) ヨコナデ、ヘラミガキ	灰褐色 黒色	4/5
26	黒色土器 A類輪	同上	口径 (15.2) 器高 (4.8) 高台径 (8.2)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ (内) ヨコナデ、ヘラミガキ	褐色 黒色	高台の 薄欠損
27	黒色土器 A類輪	同上	口径 (16.2) 器高 (5.0) 高台径 (8.6)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ (内) ヨコナデ、ヘラミガキ	灰褐色 黒色	ほぼ完形
28	黒色土器 A類輪	SE203 (掘方内)	口径 (15.2) 器高 (5.1) 高台径 (8.2)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ (内) ヨコナデ、ヘラミガキ	灰褐色 黒色	ほぼ完形
29	土師器輪兼	SE203 (掘方内)	口径 (27.4) 鍔径 (31.8)	ヨコナデ、ユビオサエ、ハケナデ	褐色	口縁部～ 鍔部1/8
30	丸瓦	同上	—	(外) タタキ、ヘラミガキ (内) 布目	灰色	破片
31	黒色土器 B類輪	SK204	口径 (12.6) 高台径 (7.8)	ヨコナデ、ヘラミガキ	黒色	1/6
32	黒色土器 B類輪	SK205	口径 (19.4)	ヨコナデ、ヘラミガキ	橙色 黒色	口縁部～ 体部1/4
33	土師器鉢	同上	口径 (29.0)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ヘラナデ	灰褐色	口縁部～ 体部1/6
34	平瓦	同上	—	(外) 繩目タタキ (内) 布目	灰色	破片
35	土師器小皿	SP203	口径 (13.0) 器高 (2.1)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	乳白色	4/5
36	土師器小皿	SP246	口径 (8.6)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	灰褐色	1/5
37	高杯	SD225	—	(外) ナデ、ヘラナデ (内) ナデ、シボリメ有	赤褐色	破片

遺物番号	種類	出土地点	法量(cm)	調整・文様等	色調 外 内	遺存度
38	土師器輪	SD228	口径 (11.8) 器高 (3.0)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	にぶい褐色	1/4
39	土師器輪	同上	口径 (12.0)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	褐色	口縁部~ 体部1/4
40	土師器把手	同上	—	ユビオサエ、ナデ、側突孔	褐色	ほぼ完形
41	瓦器小皿	第4層	口径 (10.0) 器高 (2.4)	ヨコナデ、ヘラミガキ	暗灰色	1/2
42	瓦器輪	同上	高台径 (5.2)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヘラミガキ (棒子状鉛文)	暗灰色	体部~ 底部1/4
43	青磁輪	同上	高台径 (5.0)	崩毛目文様、施釉 (高台無釉)	釉一灰 リーブ色 胎土一灰色	底部1/2
44	土師器唇盤	第5層	口径 (29.0)	ヨコナデ、ナデ	赤褐色	口縁部1/6
45	土師器輪	同上	口径 (11.8)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	褐色	1/6
46	土師器輪	同上	口径 (14.2)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	灰褐色	口縁部~ 体部1/6
47	土師器輪	同上	高台径 (3.3)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヘラミガキ (鉛文)	褐色 にぶい褐色	底部1/2
48	黒色土器 A類輪	同上	口径 (16.0)	ヨコナデ、ヘラミガキ	褐色 黒色	口縁部~ 体部1/4
49	黒色土器 A類輪	同上	口径 (17.6)	ヨコナデ、ヘラミガキ	黒色	口縁部~ 体部1/6
50	土師器甕	同上	口径 (12.8) 器高 (3.4)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ヘラミガキ	暗褐色	口縁部1/3
51	平瓦	同上	—	(外) 織目タタキ (内) 布目	黒灰色	破片
52	丸瓦	同上	—	(外) ヘラナデ (内) 布目	灰色	破片

第3章まとめ

【平安時代初頭】

生産域にかかる数条の溝を検出したが、このうち鋤溝以外に灌漑に関わると考えられる水路を確認した。水路については埋土である砂層のラミナと底部の高低差から、南から北方向に流水していたものと思われ、本調査地より北側に用水を供給していたことがわかる。なお、耕作溝との関係については、一部に見られる双方の切合い関係(S D223とS D224)から察して、鋤溝が後出であり、時期差はさほどないにしても同時期に共存していたものとは言い難い。用水の供給源としては、地形的に見て当地の南方を流れる長瀬川であったと考える。

【平安時代前期~鎌倉時代】

居住域に関わると考えられる井戸、土坑、そして多数の柱穴を検出した。これらの遺構は先述の耕作地の後に形成されたものであり、地層の状況からも当該期についてはかなり安定した土地条件であったことが窺える。柱穴は掘立柱建物あるいは柵(塀)を構成するものと思われるが、狭長な調査地ということもあって今回はそれらを復元するまでには至らなかった。ただ、柱穴の分布と相互の切合い関係から、調査地の西部および東部で幾度も建て替えが行われたことがわかる。

【近世】

調査区東部において東西方向に伸びる鶴溝を数条確認した。近・現代にあたる地層部分は重機によって除去したが、掘削中に平面および地層断面において近・現代の畑作に見る「畝」が近世と同一方向で伸びているのが確認できた。本文でも記述したように、今回検出した近世の鶴溝は近・現代の耕作、そして開発に伴う削平において失われ、辛うじて残ったものである。

以上、今回の調査では平安時代初頭頃の生産域、平安時代前期～鎌倉時代にかけての居住域、そして近世の生産域の概ね3時期の遺構面を検出した。当地について、下層確認では河川堆積層および水成層から奈良時代以前はかなり不安定な土地条件であったことが窺えたが、平安時代初頭頃には自然環境が安定し、耕作地が形成される。そして同時代前期には居住域へと転化し、それが鎌倉時代まで踏襲される。以後、中世後半頃は不明で、近世になるとまた、生産域として土地利用され、それが現代の宅地開発が行われるまで受け継がれていく。これらのことから当地は平安時代以降から現代に至るまでの長年、沖積地にあって稀少とも言える安定した土地柄であったことがわかった。

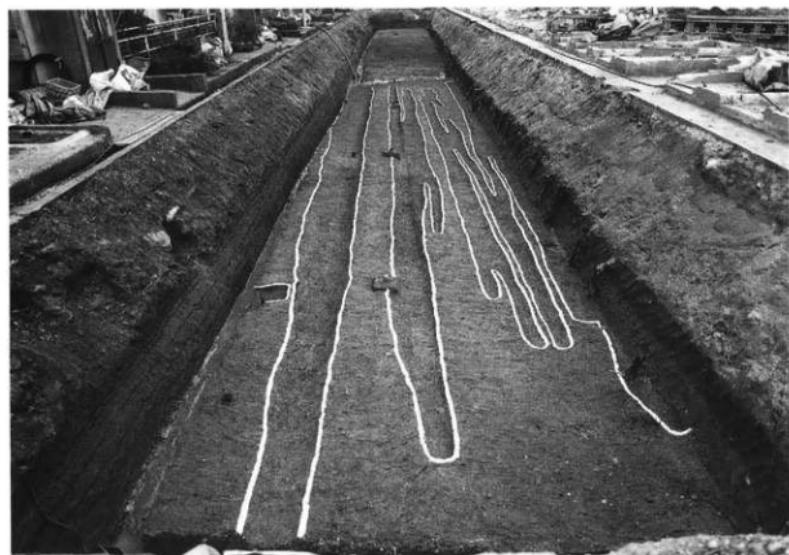
註記

- 註1 米田敏幸 1987.3 「欠作遺跡発掘調査概要」『八尾市文化財調査報告15 八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市教育委員会
- 註2 原田昌則 1989 「I 欠作遺跡(第1次調査)発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告22
- 註3 酒 斎 1991.3 「8. 欠作遺跡(90-72)の調査」『八尾市文化財調査報告23 八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市教育委員会

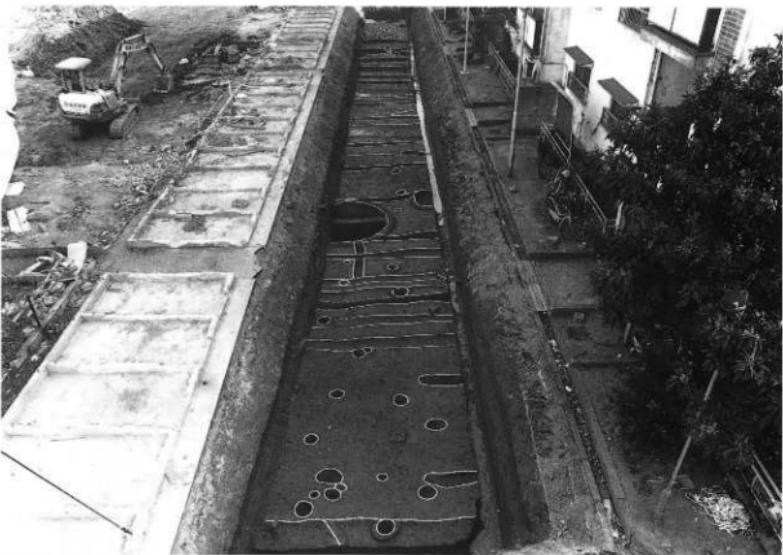
図版



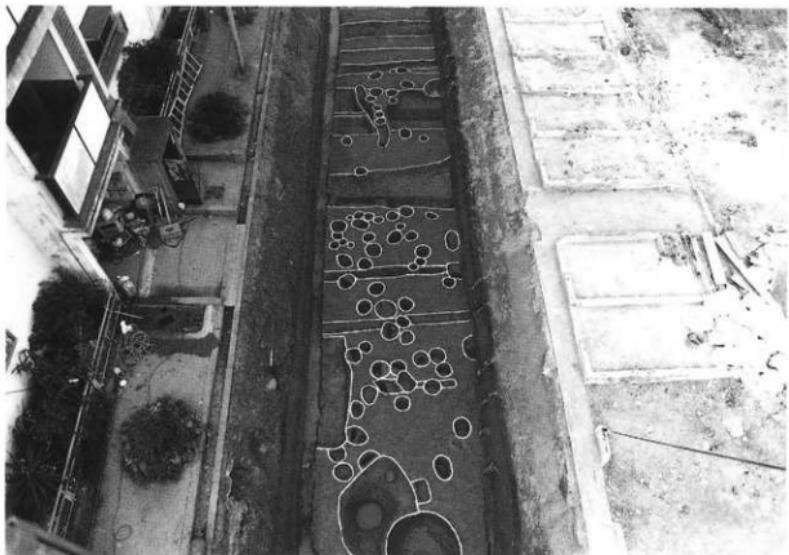
第1面（南から）



同上（東から）



第2面（西から）

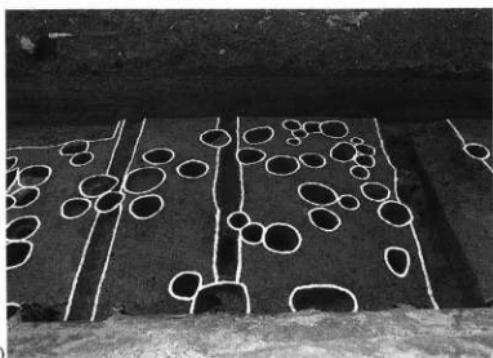


同上（東から）

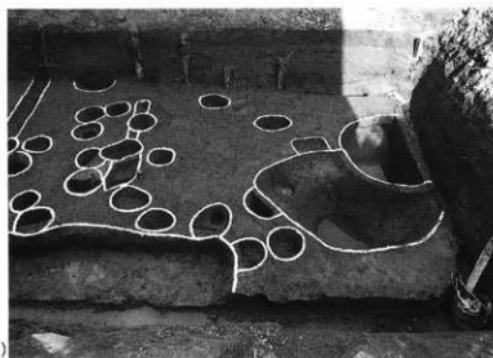
図版三 第2面 部分



第2面／D区（北から）



同上／D～E区（北から）



同上／E区（南から）



S E 202〈左〉・S E 203〈右〉(西から)



S E 202(西から)

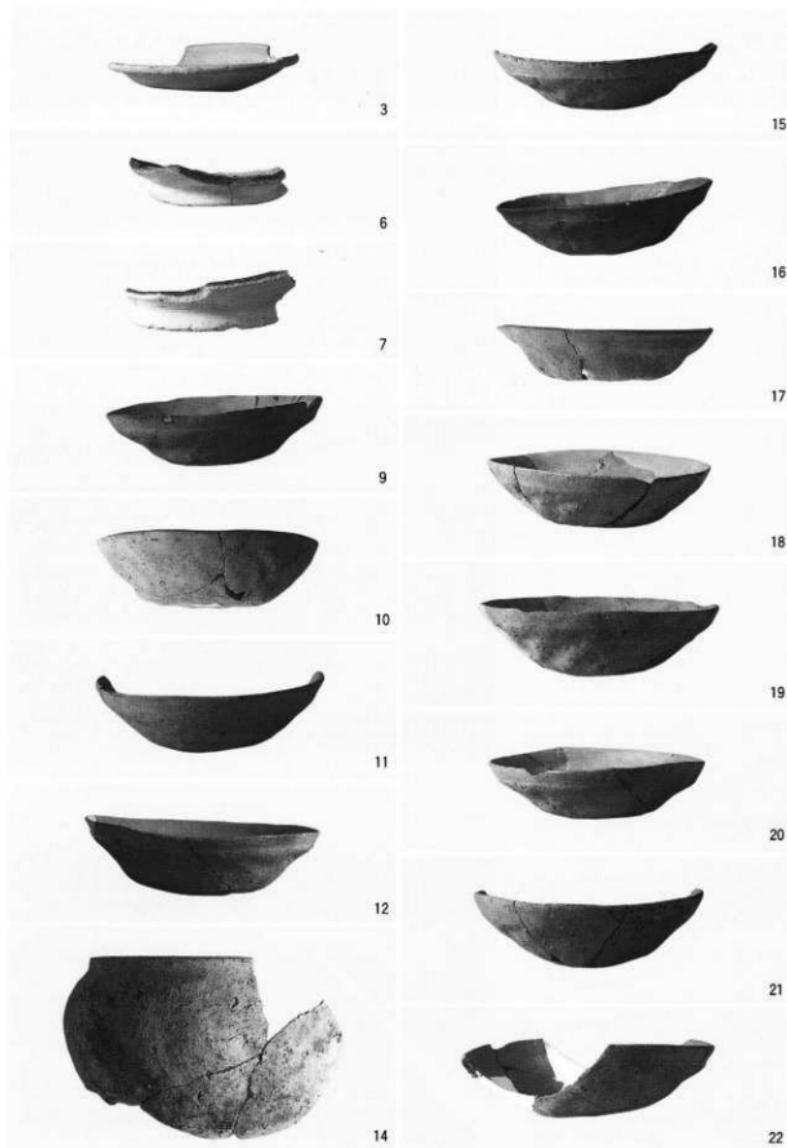


S E 203(西から)

図版五 第2面 井戸（SE）・柱穴（SP）・調査地周辺



圖版六
出土遺物（土器類）



S E 201 (3・6・7)、S E 202 (9~12・14)、S E 203 (15~22) 出土遺物

図版七 出土遺物（土器類）



23



24

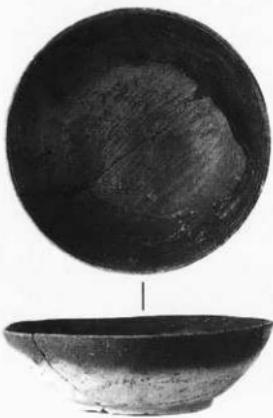


26



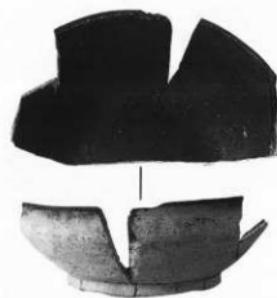
27

S E 203出土遺物



25

圖版八
出土遺物（土器類）



28



41



29



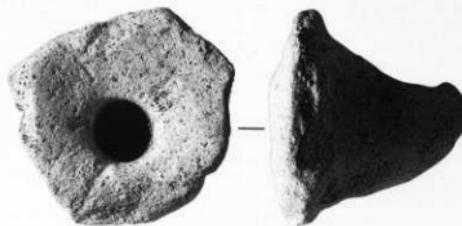
43



37



44



40

S E 203 (28・29)、S D 225 (37)、S D 228 (40)、第4層 (41・43・44) 出土遺物

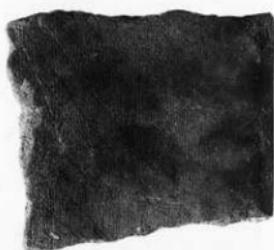
圖版九 出土遺物（瓦類）



8



30



34



51

SE 201 (8)、SE 203 (30)、SK 205 (34)、第5層 (51) 出土遺物

図版一〇 出土遺物（井戸曲物）



上段



中段



下段

S E 202曲物

VIII 矢作遺跡第4次調査（YH96-4）

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市南本町8丁目2番地で実施した市営住宅増築工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する矢作遺跡第4次調査(YH96-4)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書(八教社文第埋201-3号 平成8年8月20日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成9年3月13日～4月8日(実働16日間)にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約276m²である。
1. 現地調査においては朝田要(現(財)富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事)、辻野優子、中谷嘉多、中村百合が参加した(敬称略、五十音順)。
1. 整理業務は現地調査終了後、隨時実施し、平成16年9月30日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－坂田典彦(現 芦屋市教育委員会文化財課嘱託)・岸田靖子・辻野優子(敬称略、五十音順)、遺構・遺物の図面トレースおよび遺物写真撮影－岡田が行った。
1. 本書の執筆・編集は岡田が行った。

本　文　目　次

第1章 はじめに	147
第2章 調査概要	147
第1節 調査の方法と経過	147
第2節 基本層序	147
第3節 検出遺構と出土遺物	150
第3章 まとめ	161

挿 図 目 次

第1図 調査区設定図	148
第2図 南壁地層断面図	149
第3図 第1面平面図	150
第4図 第2面および第3面平面図	151・152
第5図 第2面 土坑(S K)断面図	153
第6図 第2面 柱穴(S P)断面図	153
第7図 S E 301断面図	154
第8図 S E 302断面図	154
第9図 第3面 上坑(S K)断面図	155
第10図 第3面 柱穴(S P)断面図	156
第11図 第3面 溝(S D)断面図	157
第12図 S K 201、S K 203出土遺物実測図	158
第13図 S E 301・302井戸側内出土遺物実測図	158
第14図 S E 302井戸側部材実測図	159
第15図 第4層出土遺物実測図	159
第16図 第4層出土錢貨拓影	160
第17図 第4層出土金属製品	160

表 目 次

第1表 第2面 柱穴(S P)一覧表	153
第2表 第3面 柱穴(S P)一覧表	156
第3表 第3面 溝(S D)一覧表	157
第4表 出土遺物観察表	160

図 版 目 次

図版一 第1面、同左／西部	図版六 S P 312、S D 303、足跡群
図版二 第2面	図版七 出土遺物(土器類) S K 203、S E 301、 S E 302、第4層
図版三 第2面／西部・東部、S P 202	図版八 S E 302(井戸側部材)、第4層(錢貨・ 金属製品)出土遺物
図版四 第3面	
図版五 S E 301、S E 302	

第1章 はじめに

本調査は、本書前項の矢作遺跡第3次調査(YH95-3)と同じく一連の市営住増築工事に伴うもので、第3次調査の翌年にあたる平成8年度に実施したものである。調査地は、第3次調査地の南約30m地点に位置する。なお、当遺跡の地理・歴史的環境については、第3次調査の項で既述しているので、そちらを参照されたい。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

本調査地の面積は、東西長約46m・南北幅約6mを測る。調査は先行の第3次調査と同様、現地表(T.P.+10.7m前後)下1m間に堆積する盛土および近・現代の耕作土層を重機によって排除した後、以下0.4m前後の平安時代～鎌倉時代に比定される堆積層を人力で掘削し、遺構および遺物の検出に努めた。本調査についても調査終了後は、調査区の西部・中央部・東部の3箇所に各2m四方のグリットを設定し、最終遺構面からさらに1m前後を掘削して下層確認調査を実施した。調査区内の地区割りについては、調査区の西端部に任意の基準点を設置し、西側から10m間隔でA～E区と呼称した。

第2節 基本層序

盛土を除き、全体で20層を確認した。このうち第0～5・10・11・14層の9層については、第3次調査に対応するものである。

第0層：既存建物基礎に伴う盛土である。層厚0.7m前後。

第1層：5B2/1青黒色シルト。近・現代の耕作土である。層厚0.05～0.15m。

第2層：10GY4/1暗緑灰色砂礫混じりシルト。層厚0.05～0.1m。近世の国産陶磁器片を若干含む作土である。

第3層：7.5YR6/3にぶい褐色シルト。層厚0.1～0.25m。調査区西部には存在しない。

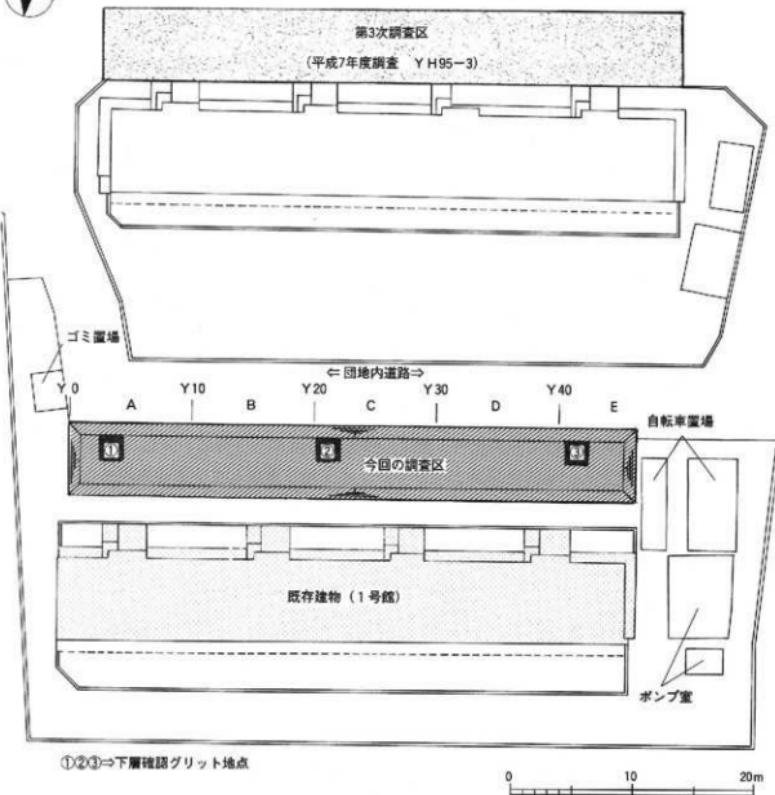
第4層：5GY3/1暗オリーブ灰色砂礫混じりシルト。層厚0.05～0.2m。調査区の東へ向かうにつれ希薄となり、東端部では存在しなくなる。平安時代～鎌倉時代初頭にかけての土師器・須恵器・黒色土器・瓦器等を含む。

第5層：7.5YR7/6橙色砂礫混じりシルト。層厚0.05m前後。調査区の東部に堆積する希薄な層である。第4層に比して砂礫を多く含み、粘性に富む。第4層と同時期の遺物を含む。本層の下面(T.P.+9.3m前後)で当該期の遺構を検出した(第3面)。

第10層：5PB7/1明青灰色シルト。層厚0.1～0.4m。水成層で未分解の植物遺体が混在する。

第11層：N6/0灰色粘土質シルト。層厚0.15m前後。調査区東部に存在する。植物炭化物ラミナが多く含まれる。

第14層：N7/0灰白色細粒砂。層厚0.5m以上。下層確認グリット①～③で確認した堆積層である。



第1図 調査区設定図 (S=1/400)

第3次調査と勘案すると河成堆積層と推定されるもので、水流方向がラミナの傾斜から南東→北西方向であることがわかる。

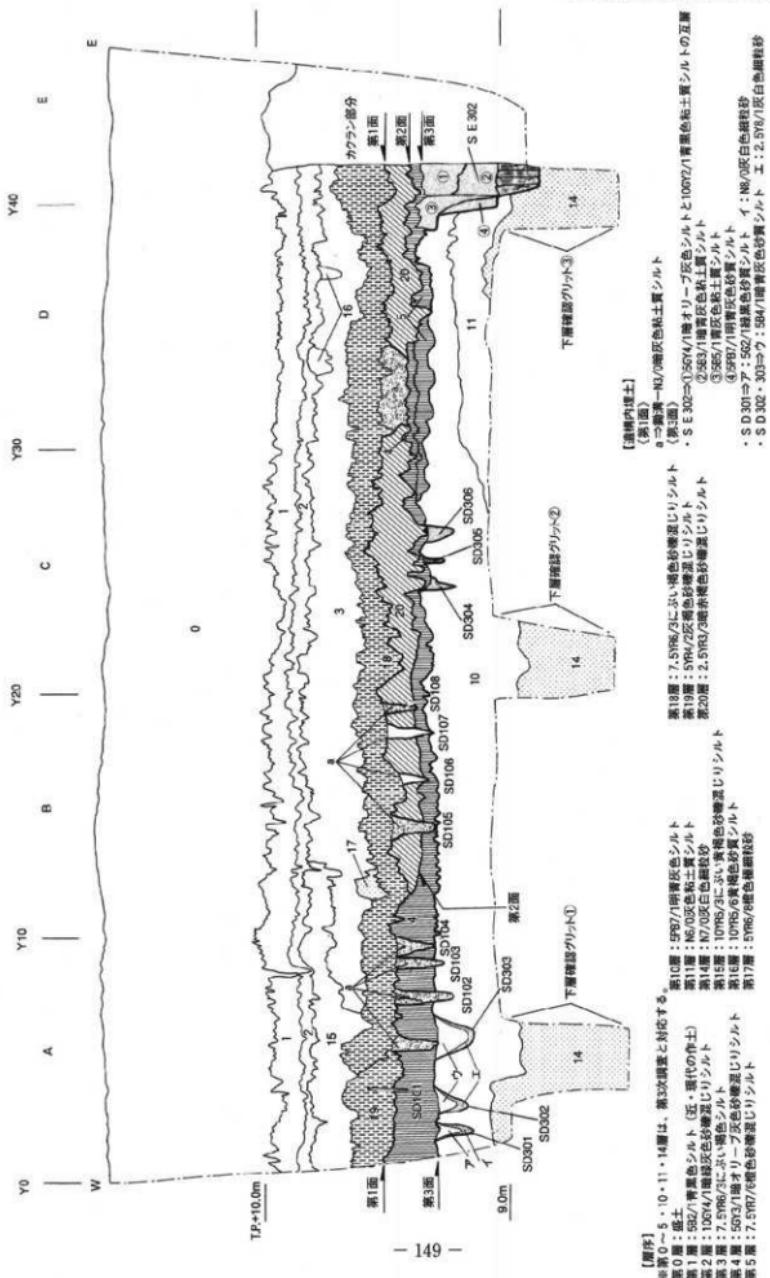
※以下の堆積層は、本調査で確認したものである。

第15層：10YR5/3にぶい黄褐色砂礫混じりシルト。層厚0.1~0.2m。調査区の西部にのみ存在する。下部には3~5mmの礫が優勢となる。

第16層：10YR5/6黄褐色砂質シルト。層厚0.1m前後。D区内で確認した。耕作に伴う鋤跡とも考えられるが、重機掘削範囲であるため平面的には捉えていない。層中には近世の染付磁器片が少量含まれていた。

第17層：5YR6/8橙色極細粒砂。層厚0.1m前後。本層も第16層と同様に遺構の可能性が高く、耕作に伴う水路が考えられる。層内に遺物を含まないが、後述の鎌倉時代前期に比定される

図 矢作遺跡第4次調査(YH96-4)



第2図 北壁地層断面図 (縦 S = 1/20、横 S = 1/200)

第18層を切っている

第18層 : 7.5YR6/3にぶい褐色砂礫混じりシルト。層厚0.05~0.25m。調査区のほぼ全域に堆積する。鎌倉時代前期に比定される土師器皿や瓦器碗等が含まれる。本層下面(T.P. +9.5m前後)で、耕作に伴う鋤溝群を検出した(第1面)。

第19層 : 5YR4/2灰褐色砂礫混じりシルト。層厚0.25~0.3m。調査区の西端部に存在する。全体的に淘汰が不良で、第18層と同時期の遺物が含まれる。本層下面(T.P. +9.5m前後)においても、耕作に伴う鋤溝群を検出した(第1面)。

第20層 : 2.5YR3/3暗赤褐色砂礫混じりシルト。層厚0.05~0.2m。調査区西部には存在しない。平安時代後期~鎌倉時代初頭にかけての土師器皿・瓦器碗等が含まれる。調査区東部では、本層下面(T.P. +9.4m前後)で当該期の遺構を検出した(第2面)。

第3節 検出遺構と出土遺物

【検出遺構】

＜第1面＞

土坑(S K)

S K101

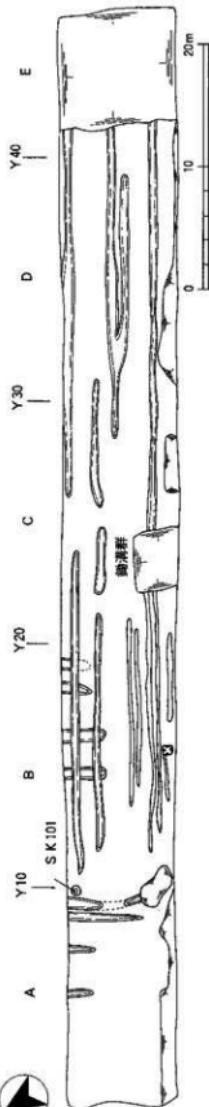
A・B区間の北壁付近で検出した。規模は掘方上面が径0.5m前後、深さは0.15mを測る。上面はほぼ円形を呈し、断面の形状は椀形を呈する。埋土は暗オリーブ灰色粘土質シルトの單一層で、遺物は出土しなかった。

鋤溝群

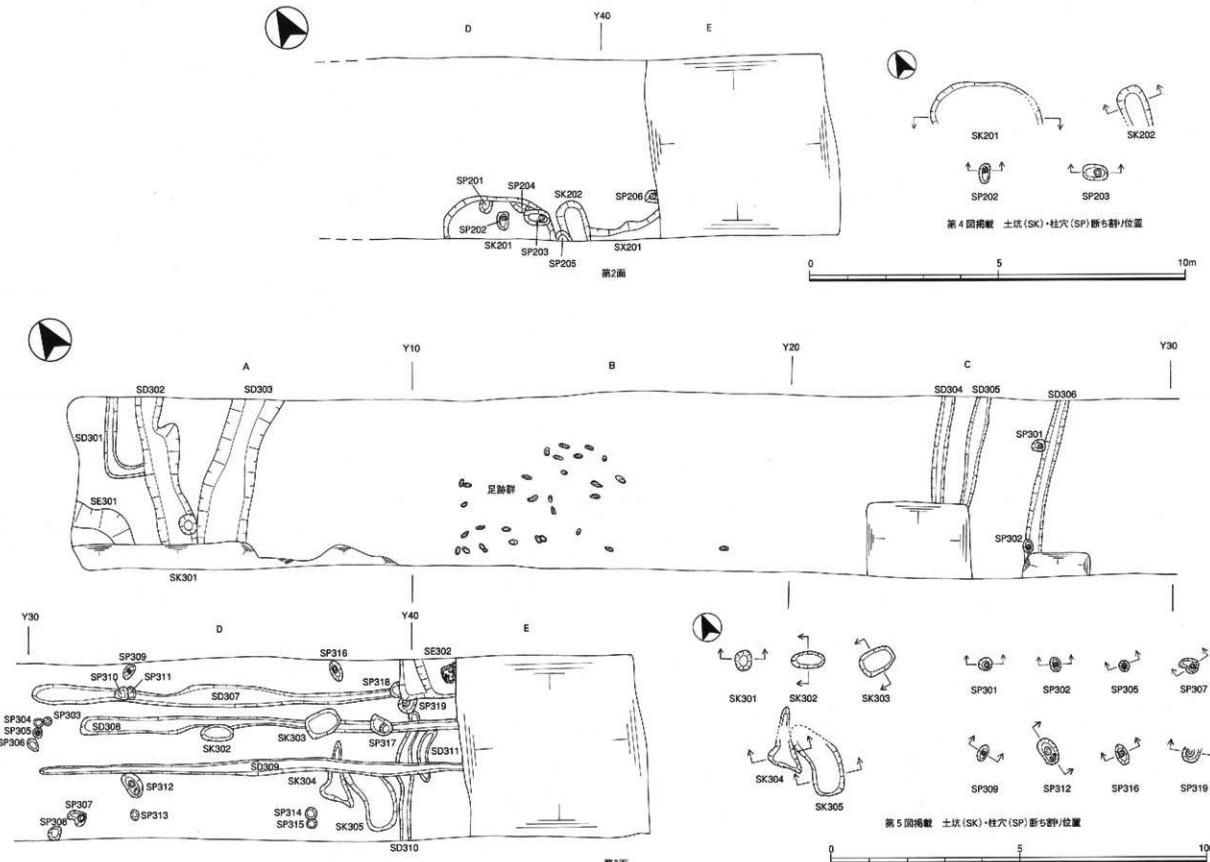
T.P.+9.5m前後を測る第18層および第19層下面において、鎌倉時代前期に比定される数条の溝群を検出した。これらは耕作に伴う鋤溝と考えられるもので、検出範囲は調査区のほぼ全域におよぶ。概ね東西方向に並行して伸びるが、調査区西部北側では8条ほど東西方向の鋤溝に切られる形で南北方向に伸びる。法量は幅0.1~0.5m、深さ0.1~0.15mを測る。各鋤溝内からは、鎌倉時代前期に比定される土師器皿や瓦器碗の破片が少量出土したが、図化できるものはなかった。

＜第2面＞

T.P.+9.4m前後を測る第20層下面において、鎌倉時代初頭頃に比定される土坑2基(S K201・202)、柱穴6個(S P201~206)、不明遺構1箇所(S X201)を検出した。これらの遺構は調査区東部にあたるH~I区の南側にのみ集中し、他地点では同時期の遺構が確認

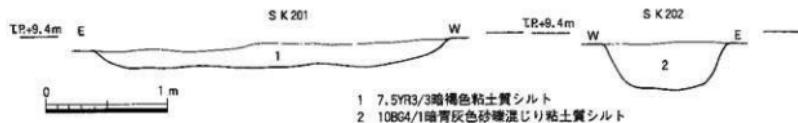


第3図 第1面平面図
(S=1/200)



第4図 第2面および3面平面図 (S=1/100)

図 矢作遺跡第4次調査(YH96-4)



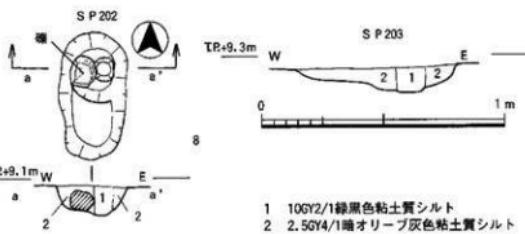
第5図 第2面 柱穴(SK)断面図(S=1/40)

できなかった。

土坑(SK)

SK201

H区で検出した。掘方の南部は調査区外に至るため、全容は不明である。掘方は検出部で東西2.88m、南北1.1m以上、深さ0.15mを測る。掘方の北東部の一部が、SP



第6図 第2面 柱穴(SP)断面図(S=1/20)

203に切られる。埋土は炭粒と偽縞が多く含む暗褐色の粘土質シルトの単一層で、12世紀後半～13世紀前半頃に比定される土師器皿と瓦器碗が出土した。

SK202

H区で検出した。掘方の南部は調査区外に至るため、全容は不明である。掘方は検出部で東西0.76m、南北1.1m、深さ0.37mを測る。掘方の西部の一部が、SP205に切られる。埋土は暗青灰色砂礫混じり粘土質シルトの単一層で、12世紀後半～13世紀前半頃に比定される土師器皿、須恵器鉢が出土した。

柱穴(SP)

柱根あるいは柱痕跡が確認されるもの、さらにそれらと掘方や埋土の類似性が見出せるものを柱穴と判断した。埋土は褐色系の粘土質シルトが大半を占め、一部には炭粒を含んだものも見られる。これらの柱穴からは出土した遺物は少なく、土師器、黑色土器、瓦器等の小片化したものが多い。各柱穴の法量、形状等については第1表に掲載した。

不明遺構(SX)

H～I区にかけて検出した。掘方は北肩のみで、南部は調査区外に至り、西部はSK202、東部は搅乱によって削平される。検出規模は、南北0.43m、東西1.69m、深さ0.12mを測る。埋土は暗灰色砂礫混じりシルトで、底部には植物遺体が床張りのように薄く敷き詰められた状況にあった。遺物は出土しなかった。

第1表 第2面 柱穴(SP)一覧表

SP番号	検出地区	長径-短径(cm)	深さ(cm)	平面形状	出土遺物	備考
SP201	H	37-32	14	橢円形	瓦器	柱根遺存
SP202	H	52-38	22	不定形		柱根遺存
SP203	H	67-33	16	橢円形	土師器、瓦器	柱根遺存
SP204	H	42-28	12	不明		SP203に一部削平
SP205	H	32-26	7	不明	土師器、瓦器	南部は調査区外
SP206	I	34-29	6	不明	土師器	東部はカクラン受ける

《第3面》

T.P.+9.3m前後を測る第4層および第5層下面において、平安時代～鎌倉時代初頭にかけての井戸2基(S E 301・302)、土坑5基(S K 301～305)、柱穴19個(S P 301～319)、溝11条(S D 301～311)、足跡群を検出した。本遺構面については、出土遺物の年代観の下限が第2面とほとんど変わらないものであるが、両面の間に第4・5層を挟むこと、出土遺物の中には平安時代初頭頃まで遡るものがあることなどから勘案して一時期古いものとした。

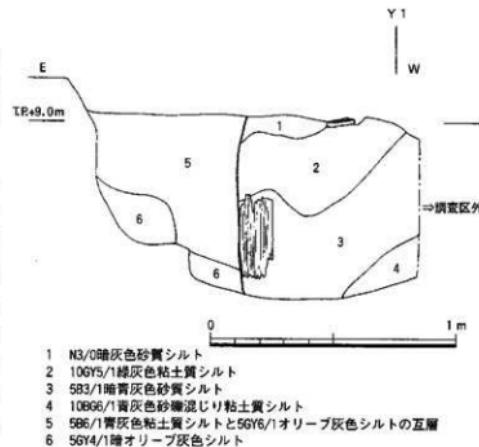
井戸(S E)

S E 301

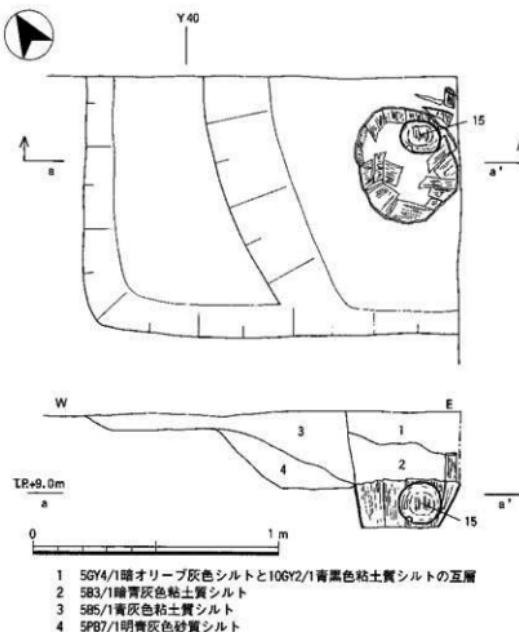
A区南西隅で検出した。掘方の西部および南部は調査区外に至るため詳細は不明であるが、井戸側の抜き取り痕跡と板材の出土から、井戸側として木枠を用いたものであったことがわかる。検出部での掘方規模は、南北および東西ともに1.6m、深さ0.95mを測る。井戸側内の埋土は上層から1～4の4層(第7図)に分類でき、遺物は第2層から10世紀後半～11世紀前半に比定される土師器皿、瓦器枕、土師器甕等が出土した。

S E 302

H～I区にかけての北壁沿いで検出した。掘方の北部は調査区外、東部は撲



第7図 S E 301断面図 (S=1/20)



第8図 S E 302断面図 (S=1/20)

乱という状況で詳細は不明であるが、井戸側として曲物と縦板を使用した井戸である。検出部での掘方規模は、南北1.07m、東西1.55m、深さ0.47mを測る。掘方の断面状況から、底部は3段式に掘削され、最深部に井戸側を据え付けていることがわかる。井戸側のほとんどは抜き取られていたが、底部に曲物1段分とその周囲に補強部材とみられる板材10数枚と角材の杭が2本遺存していた。復元すると径45cm前後を測る。これら部材のほとんどは腐食が著しく、そのうち辛うじて図化できたものは第8図に掲載した杭2本と板材2枚だけである。井戸側内埋土は上下2層(第8図)に分層でき、第2層からは13世紀初頭頃に比定される土師器皿、瓦器碗が出土した。そのうち瓦器碗2点はほぼ完形品である。出土類例から埋め戻しに祭祀用として用いられた可能性が高い。

土坑(S K)

S K 301

A区の南東部で検出した。長径58cm、短径47cmの北西—南東方向にやや長い梢円形を呈し、深さ27cmを測る。埋土は暗灰色の粘土質シルトの單一層で、土師器小皿の破片が出土した。

S K 302

G～H区にかけて検出した。長径88cm、短径47cmの東西方向に長い梢円形を呈し、深さ22cmを測る。埋土は暗灰色砂礫混じり粘土質シルトの單一層で、瓦器碗と瓦質土器の破片が出土した。

S K 303

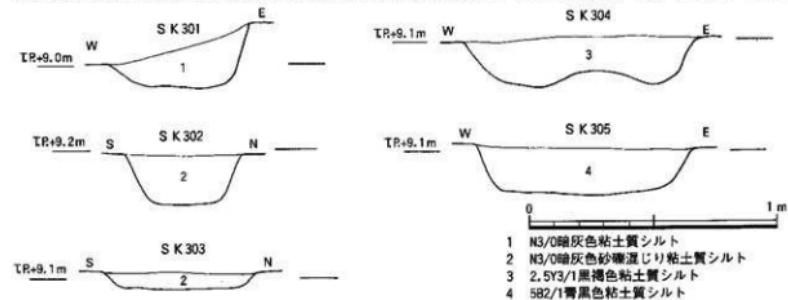
H区で検出した。長径94cm、短径63cmの北東—南西方向にやや長い隅丸長方形を呈するが、それに比して深さは6cmとひじょうに浅い。埋土は暗灰色砂礫混じり粘土質シルトの單一層で、土師器碗と黒色土器碗の破片が少量出土した。

S K 304

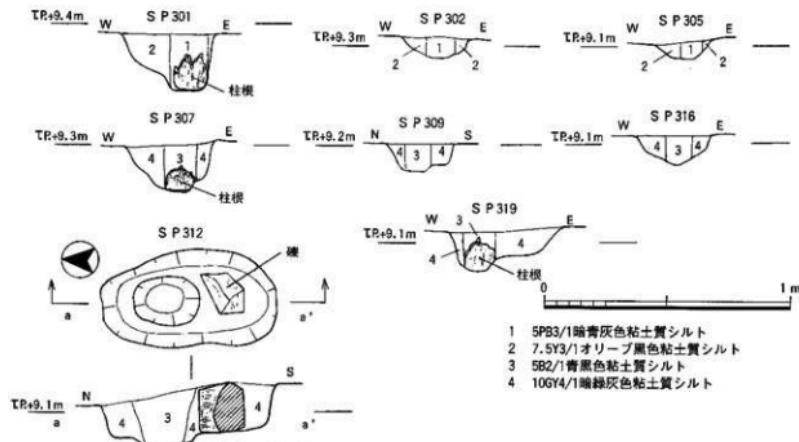
S K 303の南側で検出した。掘方は長径161cm、短径95cmで南北に長い不定形を呈し、深さ19cmを測る。造構の北部は、東西方向に伸びるS D 309によって分断される。埋土は炭粒と偽蝶が多く含む黒褐色粘土質シルトの單一層で、土師器碗および瓦器碗の底部が数点出土したが図化することはできなかった。

S K 305

S K 304の東隣で検出した。掘方の北部がS D 309およびS K 304に切られるため、全容は不明である。掘方は検出部で長径170cm、短径88cm、深さ19cmを測る。平面の形状は、南から北西に向けて



第9図 第3面 土坑(S K)断面図 (S=1/20)



第10図 第3面 柱穴(S P)断面図(S=1/20)

やや屈曲する不定形を呈する。埋土は炭粒を多量に含む青黒色粘土質シルトの単一層で、遺物は黒色土器碗の破片が数点出土した。

柱穴(S P)

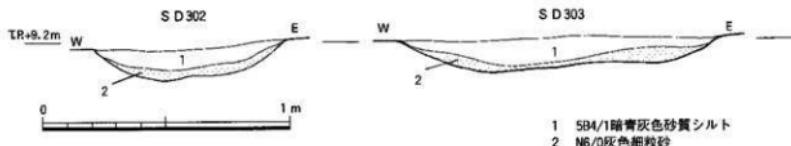
柱根あるいは柱痕が確認されるもの、さらにそれらと掘方や埋土の類似性が見出せるものを柱穴と判断し、全体で19基検出した。分布状況としては東半部に集中し、建て替えを示す切合い関係も見られたが、建物を復元するまでには至らなかった。平面形状は、円形あるいは楕円形を呈するものが大部分である。規模は径21~71cm、深さ5~19cmを測る。埋土は褐色系の粘土質シルトが多くを占め、一部には炭粒を含んだものも見られる。これらの柱穴から出土した遺物は少なく、土師器、黒色土器、瓦器等の小片化したものが多い。なお、各柱穴の法量、形状等については第2表に掲載した。

第2表 第3面 柱穴(S P)一覧表

SP番号	検出地区	長径-短径(cm)	深さ(cm)	平面形状	出土遺物	備考
SP301	C	38-31	19	円形	土師器	柱根遺存
SP302	C	36-26	8	楕円形	瓦器	柱痕確認
SP303	D	26-21	16	円形		
SP304	D	26-28	12	円形	土師器、黒色土器	
SP305	D	38-26	7	円形	土師器、瓦器	柱痕確認
SP306	D	42-28	6	楕円形	瓦器土器	
SP307	D	52-35	18	不定形		柱根遺存
SP308	D	42-36	13	楕円形	瓦器	
SP309	D	46-26	10	楕円形		柱痕確認
SP310	D	36-34	15	不定形	土師器、瓦質土器	
SP311	D	35-21	7	不明		
SP312	D	71-46	19	楕円形	土師器、瓦質土器	板石遺存
SP313	D	30-24	14	楕円形	瓦器	
SP314	D	33-30	12	円形	土師器	
SP315	D	38-25	5	円形		
SP316	D	58-31	12	楕円形		柱痕確認
SP317	D	65-44	8	楕円形	土師器、瓦器	
SP318	D	41-24	9	不明	土師器	
SP319	D-E	46-34	17	不明	土師器、馬鹿土器	柱根遺存

溝(SD)

全体で11条(SD301~311)を検出した。このうちSD301~303の3条については埋土が上下の2層に分層でき、下層にはラミナを有する細かい砂層の埋積が確認された。層厚は2~3cmほどで、これは流水があったことを示すから灌漑用水路であったことが考えられる。流水方向は底面レベル数値から勘案して、南→北と思われる。また、SD301については時期的にSD302・303との切合い関係から一時期古いものと判断される。そしてこの溝は、SD302の中ほどから西へ短く伸びた後北へ屈曲する。SD302・303は、検出状況から察して南側では一筋で、途中から二股に分岐させているような状況が想定される。3条の各溝の埋土はSD301が上層一層黒色砂質シルト、下層一灰白色細粒砂、SD302・303はいずれも上層一暗青色砂質シルト、下層一灰色細粒砂のそれぞれ2層に分層できる。それ以外の溝SD304~311の8条は、すべて耕作に伴う鈍溝である。SD304~306・310・311の5条は南北方向、SD307~309の3条は東西方向に伸びる。埋土はすべて黒褐色粘土質シルトの單一層である。なお、各溝の法量および出土遺物等の詳細については第3表に掲載した。



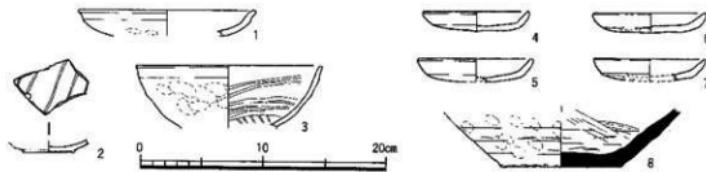
第11図 第3面 溝(SD)断面図 (S=1/20)

第3表 第3面 溝(SD)一覧表

SD番号	検出地区	長径・距幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	性格	備考
SD301	A	31~45	9~14	土師器皿	水路	東部をSD302に切られる
SD302	A	52~100	7~12		水路	南部東脇をSK301に切られる
SD303	A	108~138	8~14	土師器皿、土師器輪	水路	
SD304	A	28~32	5~7		鈍溝	
SD305	A	27~51	4	瓦胎焼、羽釜	鈍溝	
SD306	A	32~41	10		鈍溝	西脇をSP301・302に切られる
SD307	A	21~62	11~14		鈍溝	SE302、SP310・311・318・319に切られる
SD308	B	19~48	7~9	土師器・瓦器	鈍溝	SK302・303、SP317に切られる
SD309	B	18~42	11	土師器皿	鈍溝	
SD310	B	29~43	5~11	黒色土器輪	鈍溝	SP319、SD307・308に切られる
SD311	B	25~30	14		鈍溝	SD307・308に切られる

足跡群

B区で検出した。範囲は南北3m、東西7.3mにおよぶ。すべてヒトの足跡で、牛等の偶蹄類のものは見られない。足跡の長さは11~30cmとばらつきがあり、歩行方向を明確にできるような規則性は確認できなかった。調査区内で足跡が確認できたのは当地点のみである。面上にレベル測量すると、当地点は全体と比較して5~10cm低い地盤となっている。平面および地層断面の観察から、一時期「水没かり」状態であったところに踏み込まれたものではないかと考える。足跡内埋土および上面の覆土は暗褐色シルトに中~細粒砂が混じるもので、遺物は出土しなかった。



第12図 SD 201 (1~3)、SK 203 (4~8) 出土遺物実測図 (S=1/4)

【出土遺物】

《第2面》

S K 201

土師器皿1点(1)、瓦器碗2点(2・3)の計3点を図化した。1は口縁部のヨコナデが強く、端部は外反する。2は高台が退化している。3は外面のヘラミガキが施されず、内面のヘラミガキには隙間が見られる。これらは12世紀後半～13世紀前半頃に比定される。

S K 202

土師器皿4点(4～7)、須恵器鉢1点(8)の計5点を図化した。4～7はいずれも立上がりが1段ナデのものである。8は平底の底部を有し、外面には指頭圧痕が顕著に認められる。これらも12世紀後半～13世紀前半頃に位置づけられる。

《第3面》

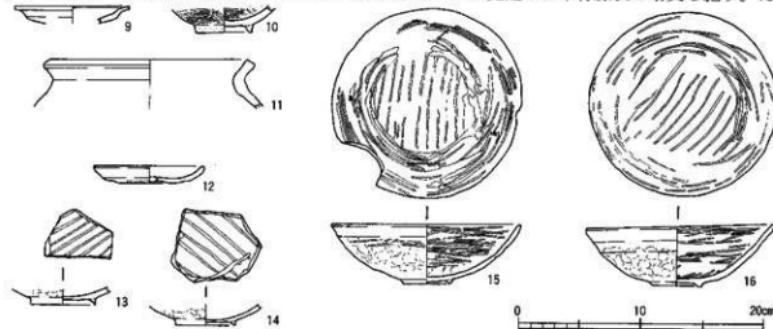
S E 301

井戸側内から出土した土師器皿1点(9)、黒色土器B類碗1点(10)、土師器甕1点(11)の計3点を図化した。9は口縁部が「て」の字状を呈する。10は内外面ともに燃し焼きされ、ヘラミガキも密である。11は短い口縁部で、端部には外傾する面を有する。これらは10世紀後半～11世紀前半に位置づけられる。

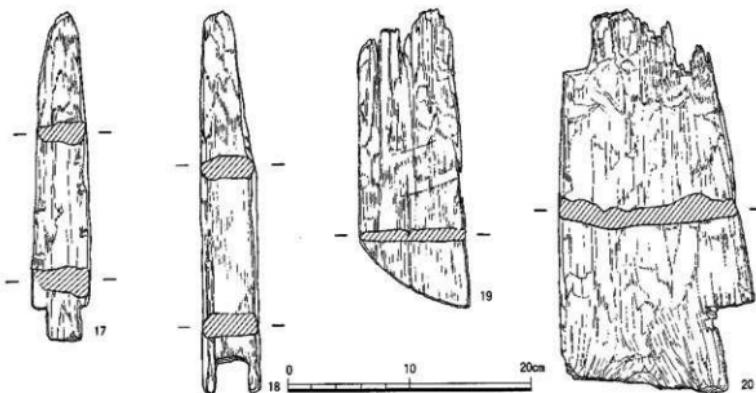
S E 302

土器類

井戸側内から出土した土師器皿1点(12)、瓦器碗4点(13～16)の計5点を図化した。12は底部がやや窪む「へそ皿」風で、灯明皿の可能性がある。13～16は見込みに平行線状の暗文を施す。15・



第13図 SD 301 (9~11)、SE 203 (12~16) 井戸側出土遺物実測図 (S=1/4)



第14図 S E 302井戸側部材実測図 (S=1/2)

16は内面のミガキが粗く、外面にはミガキが施されなくなる。13・14も底部のみ残存するものであるが、おそらく15・16と同形態のものと思われる。以上は13世紀初頭頃の所産である。

井戸側木製部材

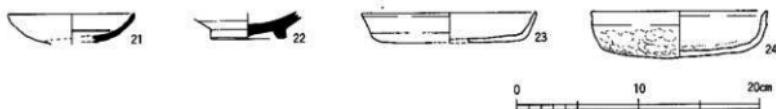
井戸側として使用されていた木製部材のなかで、遺存状態の良好なもの4点(17~20)を図化した。17・18は検出時に井戸側の外で補助杭として打ち込まれていたが、両者には凹凸の「ほぞ」を有す形状から木組み枠あるいは建築部材の一類であったことが考えられる。17は残存長13.6cm、18は15.7cmで、両者とも幅2.4cm、厚さ1.0cmを測る。19・20はいずれも検出時に井戸側の外周に突き立てられていた10数枚のうちの2枚である。19は曲物の底板で、残存長10.3cm、残存幅4.5cm、厚さ0.05cmを測る。20は一端に削り込みの加工が見られ、何らかの木製品が転用されたものと思われるが詳細は不明である。残存長15.7cm、幅8.0cm、厚さ1cm前後を測る。

《第4層》

輸入白磁皿(21)、輸入白磁碗(22)、土師器皿(23・24)の土器類のほか、銅錢(25)と用途不明金属製品(26)の計6点を図化および拓影した。

土器類

21・22はいずれも中国製で、胎土はやや灰色を呈し、釉は薄くかけられ黄色味を帯びている。両者とも外底部および高台部に釉は掛かっていない。23は平坦な底部から斜上方へ直線的に立ち上がる口縁部に至り、端部はやや摘み上げられる。24は、やや平坦な底部から直上気味に立ち上がる口縁部に至り、端部は内傾する面を有する。体部外面のユビオサエが顕著に認められる。以上は、11

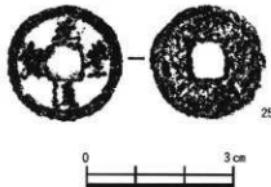


第15図 第4層出土遺物実測図 (S=1/4)

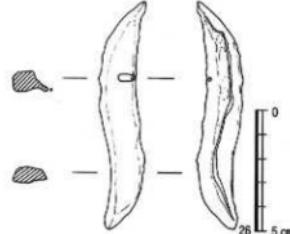
世紀後半～12世紀前半に比定される。

【錢貨・金属製品】

25は渡来銭「元豊通寶」(初鑄1078年)を鋳写したいわゆる模鋳錢である。本錢に比べ厚さが薄く、鋳上がりが悪い。26は鉄製で、「S」字形を呈し赤銅色を呈する。片面は研磨されているが、もう片面は未調整で粗雑なままである。また、研磨されている面から刺突された径1ミリほどの貫通孔が1箇所認められる。刀身と柄を固定する装飾金具の「日貫(めぬき)」の未完成の可能性があるが、これについては憶測の域を出ない。



第16図 第4層出土銭貨拓影 (S=1/1)



第17図 第4層出土金属製品 (S=1/2)

第4表 出土遺物観察表

遺物番号	種類	出土地点	法量(cm)	調査・文様等	色調 外 内	進存度
1	土師器皿	SK201	口径 (14.2)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	乳白色	口縁部1/4
2	瓦器輪	同上	高台径 (4.1)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヘラミガキ (暗文)	淡灰色	底部1/2
3	瓦器輪	同上	口径 (15.0)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヘラミガキ (暗文)	灰色	口縁部～ 体部1/4
4	土師器皿	SK203	口径 (8.6)	ヨコナデ、ナデ	乳灰色	1/4
5	土師器皿	同上	口径 (8.4)	ヨコナデ、ナデ	乳灰色	1/2
6	土師器皿	同上	口径 (8.8)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	乳灰色	1/4
7	土師器皿	同上	口径 (8.8)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	乳灰色	1/3
8	須恵器輪	同上	底径 (9.6)	ユビオサエ、回転ナデ、ヘラナデ	灰青色	底部1/3
9	土師器皿 <small>(井戸側内)</small>	SE301 <small>(井戸側内)</small>	口径 (9.2)	ヨコナデ、ユビオサエ	褐色	1/5
10	黒色土器 B類輪	同上	底径 (4.4)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヘラミガキ	黒色	底部3/4
11	土師器皿	同上	口径 (16.2)	ヨコナデ、ナデ	灰褐色	口縁部1/6
12	土師器皿 <small>(井戸側内)</small>	SE302 <small>(井戸側内)</small>	口径 (8.7)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	乳白色	1/5
13	瓦器輪	同上	高台径 (5.4)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヘラミガキ (暗文)	灰黑色	底部1/2
14	瓦器輪	同上	高台径 (4.8)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヘラミガキ (暗文)	灰黑色	底部のみ
15	瓦器輪	同上	口径 器高 高台径 (15.6) (4.8) (3.6)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ (内) ヘラミガキ (暗文)	灰黑色	ほぼ完形
16	瓦器輪	同上	口径 器高 高台径 (15.0) (4.9) (3.8)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヘラミガキ (暗文)	灰黑色	完形
21	白磁皿	第4層	口径 (10.6)	外底部分は無釉。	白-灰オーラー色 胎土-灰色	1/4
22	白磁碗	同上	高台径 (5.4)	高台および高台脇部分は無釉。	白-灰オーラー色 胎土-灰色	底部1/2
23	土師器皿	同上	口径 (14.2)	ヨコナデ、ナデ	褐色	1/4
24	土師器輪	同上	口径 器高 (12.0) (3.4)	(外) ヨコナデ、ユビオサエ (内) ヨコナデ、ナデ	にぶい褐色	5/6

第3章　まとめ

今回の調査地点の北側で実施された第3次調査(本書報告)では、平安時代初頭の生産域、平安時代前期～鎌倉時代にかけての居住域を検出している。今回の調査においても若干の差異はあるものの、時期および遺構の性格ともに概ね対応する成果を得ることができた。以下、第3次調査も含め当地における平安時代以降の土地利用の変遷を記述し、まとめとしたい。

第3次、第4次調査では工事掘削深度の制約から、平安時代より遡る奈良時代以前の様相については、グリットによる部分的な下層確認調査でしか行うことができず、詳細は不明である。しかしながら、地層から勘案すると厚い河川堆積層や洪水に伴う水成層が観察されることから、少なくとも奈良時代においては不安定な土地条件であったことが窺われる。その後、平安時代になって自然環境が安定し、耕作溝や灌溉用の水路に見られる耕地化が進められるようになる。そしてさほど時期差を有さない平安時代前期頃には居住域が形成されるようになるが、明確に生産域から居住域へ移化したとは今回の調査だけでは断言できない。それは、当該期における市内の遺跡や長原遺跡(大阪市)の調査例から、生産域と居住域が区画溝によって同時期・同一面上で検出されている例が多く見られるからである。今回の調査においても柱穴の分布状況から生産域を生かしながらも全域ではなく、選定して屋敷地が形成されたことを念頭におきたい。鎌倉時代以後は、居住域であったところがまた生産域へと転化し、近世から現代へと踏襲されていったようである。第3次も第4次も調査区内の断面を観察する限り、当該期は連続と耕作地としての攪拌が見られ、出土遺物も碎片で僅少であり、少なくとも居住域が形成された様子は認められない。また、当該期の土地条件を地層からみると、下層確認で見られた洪水等の形跡ではなく、長瀬川右岸に形成された自然堤防状の中でも比較的安定した地域であったことがわかった。

以上、かなり雑ばくなまめとなってしまったが、要として今回の第3・4次調査では平安時代～鎌倉時代にかけての土地利用の変遷を垣間見ることができた。当地一帯においては小規模な遺構確認調査を除き、本格的な調査は今回が初めてとなる。まだまだ、考古学的には実態の不明な地域であり、今回明らかにできなかった平安時代以降の条里や屋敷割りの様相については、今後周辺における調査の累積を待って再度検討したい。

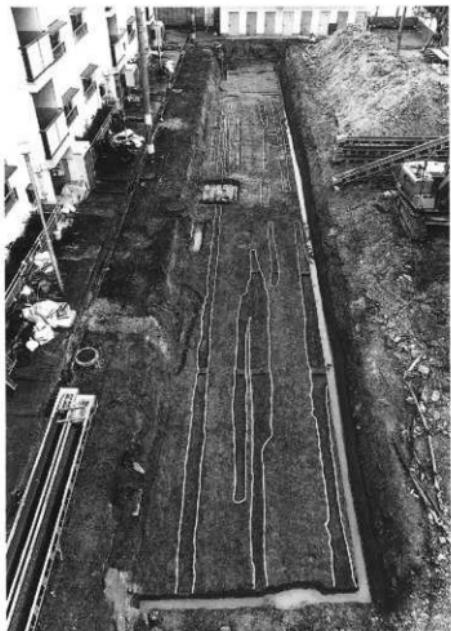
(註)

1. 鳩谷和彦氏(堺市立埋蔵文化財センター)に実見、ご教示頂いた。

<土器編年についての参考文献>

- ・近江俊秀・岡田清一 1989.3 「河内中南部における古代末期から中世の土器の諸問題 一木の本遺跡 SW-02出土遺物を中心として」『八尾市文化財紀要4』八尾市教育委員会文化財室
- ・佐藤 隆 1992.3 「第Ⅱ章 遺構と遺物の検討 第2節 平安時代における長原遺跡の動向」『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告V 市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書 後編』財団法人 大阪市文化財協会

図版



第1面（東から）



同上／西部（北西から）

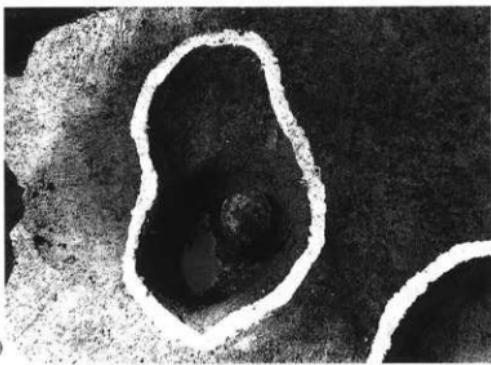
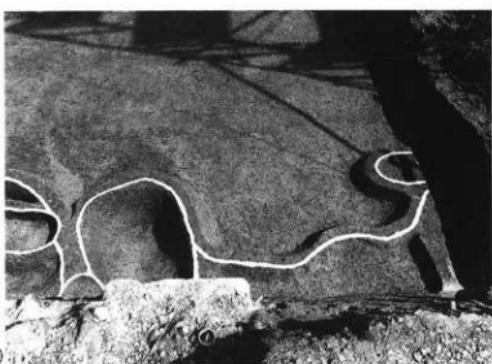


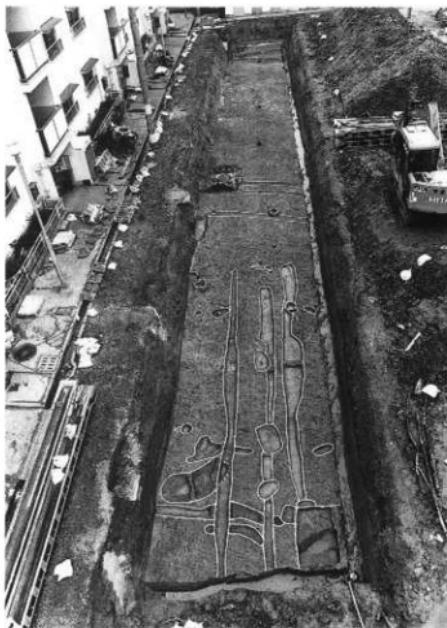
第2面（南西から）



同上（北から）

図版三 第2面 部分





第3面（東から）



同上（西から）



SE 301 (北から)



SE 302 (西から)



同上／井戸側内 (南から)



S P 312 (北から)

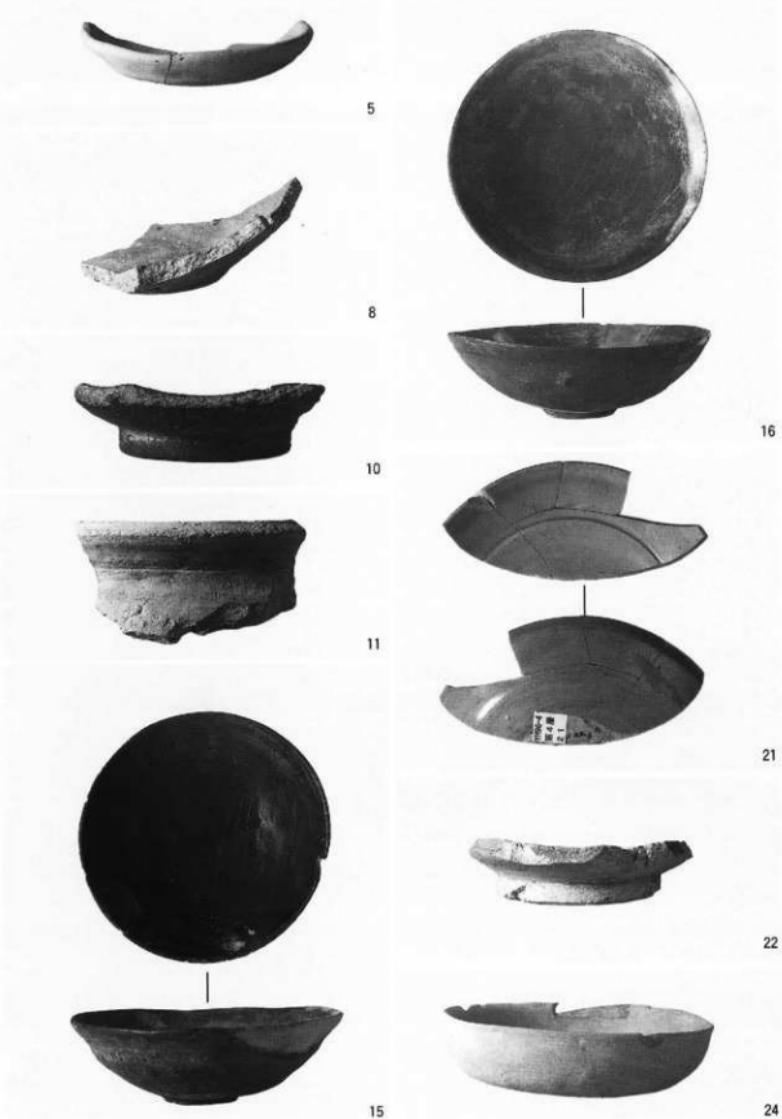


S D 303 (南から)



足跡群 (南から)

図版七 出土遺物（土器類）



S K203 (5・8)、S E301 (10・11)、S E302 (15・16)、第4層 (21・22・24) 出土遺物

図版八 戸部材・金属製品・錢貨



17



18



19



20



25



26

S E 302 (17~20)、第4層 (25・26) 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅかいほうこく
書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告81
圖書名	I 山賊遺跡 (第3次調査) II 跡部遺跡 (第23次調査) III 老原遺跡 (第6次調査) IV 老原遺跡 (第7次調査) V 老原遺跡 (第8次調査) VI 中田遺跡 (第10次調査) VII 矢作遺跡 (第3次調査) VIII 矢作遺跡 (第4次調査)
卷次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	81
編集者名	I ~ IV・VI 原田昌則 V 西村公助 VII・VIII 向田清一
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700
発行年月日	西暦2004年12月29日

ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市	町村					
やまがいせき 山賊遺跡 (第3次調査)	おおさかみやまし 大阪府八尾市 山賊4丁目 34-1, 35-1	27212	32	34° 38° 39°	135° 36° 17°	19950109 ~ 19950210	約675	察・研修 施設建設に伴う調査
あとへいせき 跡部遺跡 (第23次調査)	おおさかみやまし 大阪府八尾市 跡部4丁目 春日町4丁目 4番	27212	64	34° 36° 53°	135° 35° 33°	19970221 ~ 19970331	約308	共同住宅 建設に伴う調査
おいはらいせき 老原遺跡 (第6次調査)	おおさかみやまし 大阪府八尾市 おいはら 老原1丁目	27212	38	34° 36° 20°	135° 36° 23°	19951204 ~ 19951221	約150	道路建設 に伴う調査
おいはらいせき 老原遺跡 (第7次調査)	おおさかみやまし 大阪府八尾市 おいはら 老原1丁目	27212	38	34° 36° 20°	135° 36° 26°	19961202 ~ 19961224	約180	道路建設 に伴う調査
おいはらいせき 老原遺跡 (第8次調査)	おおさかみやまし 大阪府八尾市 おいはら 老原1丁目	27212	38	34° 36° 18°	135° 36° 26°	19971104 ~ 19971119	約220	道路建設 に伴う調査
なかたいせき 中田遺跡 (第10次調査)	おおさかみやまし 大阪府八尾市 なかた 八尾木北3丁目	27212	28	34° 36° 40°	135° 37° 05°	19921026 ~ 19930122	約370	河川改修 に伴う調査
やはぎせき 矢作遺跡 (第3次調査)	おおさかみやまし 大阪府八尾市 やはぎ 南本町8丁目 18-2他	27212	74	34° 36° 41°	135° 36° 31°	19951127 ~ 19951220	約285	市営住宅 増築工事 に伴う
やはぎせき 矢作遺跡 (第4次調査)	おおさかみやまし 大阪府八尾市 やはぎ 南本町8丁目 2	27212	74	34° 36° 40°	135° 36° 30°	19970313 ~ 19970408	約276	市営住宅 増築工事 に伴う

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山賀遺跡 (第3次調査)	集落	弥生時代前期後段 ～中期前半	土坑・溝・小穴	弥生土器・石器	前期新段階の集落域 が東部に広がること を確認。
跡源遺跡 (第23次調査)	集落	弥生時代後期末	土坑・溝	弥生土器	
	集落	古墳時代初期前半 ～後期（庄内式古 相～新相）	土坑・溝・小穴	古式土師器	
	集落	古墳時代前期前半 (布留式古相)	井戸・土坑・溝	古式土師器	
老原遺跡 (第6次調査)	集落	平安時代後期～鎌 倉時代初頭	土坑・溝・小穴	土師器・瓦器・ 中國產磁器	
	集落	室町時代後期	溝	上師器・瓦器・ 瓦質土器・國產 陶器・木器	
	生産域	江戸時代中期	井戸・石組み溝	土師器・國產陶 器・石臼・砾石	
老原遺跡 (第7次調査)	集落	平安時代後期	溝・小穴	土師器	
	集落	鎌倉時代前期	溝・小穴	土師器・瓦器・ 瓦質土器・中國 產磁器・屋瓦	伝「五条宮寺」に開 拓した軒丸・軒平瓦 の出土。
	集落	室町時代前期～中 期	土坑・溝	上師器・須恵器・ 瓦質土器・屋瓦	
老原遺跡 (第8次調査)	集落	平安時代後期	土坑	土師器・黒色土 器・瓦器	
	集落	鎌倉時代～江戸時 代	溝	土師器・瓦器・ 瓦質土器・中國 產磁器・屋瓦	
中田遺跡 (第10次調査)	集落	古墳時代前期前半 (布留式古相)～ 古墳時代中期後半	土坑・溝・小穴	古式土師器・瓦 質土器・須恵器	古墳時代前期後半(布 留式新相)の陶質土 器の発が出土。
矢作遺跡 (第3次調査)	生産域	平安時代初期	溝		
	集落	平安時代前期～鎌 倉時代	井戸・土坑・柱 穴	土師器・黒色土 器・須恵器・中 國產磁器・屋瓦	
矢作遺跡 (第4次調査)	集落	平安時代～鎌倉時 代	井戸・土坑・柱 穴・溝	土師器・黒色土 器・瓦器	
	集落	鎌倉時代初期	土坑・柱穴・不 明遺構	土師器・須恵器・ 瓦器	
	生産域		溝		

財団法人八尾市文化財調査研究会報告81

- I 山賀遺跡（第3次調査）
- II 跡部遺跡（第23次調査）
- III 老原遺跡（第6次調査）
- IV 老原遺跡（第7次調査）
- V 老原遺跡（第8次調査）
- VI 中田遺跡（第10次調査）
- VII 矢作遺跡（第3次調査）
- VIII 矢作遺跡（第4次調査）

発行 平成16年12月
編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒582-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
TEL・FAX0729(94)4700
印刷（株）近畿印刷センター
〒582-0821 大阪府柏原市本郷5丁目6番25号
TEL0729(73)5918
表紙 レザック66〈260kg〉
本文 書籍用紙〈70kg〉
図版 ニューエイジ〈70kg〉

